

---

# 宇宙の騎士は I S の世界でどう動く！？

リーゼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宇宙の騎士はISの世界でどう動く…?

### 【著者名】

リーゼ

N4233X

### 【あらすじ】

子供を助けて逆に車に引かれて死んだ男が神の玩具になるわけがなく、逆に神を強いたげてISの世界に転生する。宇宙の騎士の力を得て…。

ISにオリ主を混ぜた駄文です。作者は原作を全く知りませんが、それなりに頑張つていいつと思想います。

## episode - 0 いきなり死すー? そして授かる序曲の騎士の方 (前書き)

やつひまつた…………… orz  
間違いなく自分で書いた中で駄文オブザイヤーにてノートをやる  
ものを……………。

でも後悔は……………ひょっとしてやるかも……………  
反省は海よりも深く……………

## episode -0 いきなり死す！？そして授かる宇宙の騎士の力

やあ、初めまして！

俺は如月 直哉。あやかにしあや

二十歳の大学生だった（・・・）男だ！

えつ？ 何でだつたつて？？ それはね………… #

「ホントにすまんかった！だから俺の背中の足をどけてくれないか  
つ！？」

この神とか名乗ってるイケメンに殺されたからだよつ……ギリッギ  
リッ……（更に力を込めて踏みにじる）

「ああああああつ！？！？やめてえええつ！折れちゃう折れちゃ  
う！？」

「ああん？ 人様の事を殺しといて我が物顔してゐやつたの戯れ言なん  
ぞ聞こえんなんあ！」

ギリッギリッギリッギリッ……！

「らめえええつ！ 別の世界に旅立つやうからあああああつ！？」

そもそも、何で俺が殺されたか…………。

話は数時間前に遡る……。

俺は講義が終わってちよつとゲーセンに寄ったんだ。取り敢えずク  
レーンゲームをやつてそれなりに景品も取れたし、帰ろうかなあと

思つたんだ……。

でも、その途中で子供が車道に飛び出して跳ねられそうだったんだ。俺は無我夢中で走ったよ。取つた景品何かほっぽり出してね……。それで間に合ひて子供を歩道に突き飛ばしたはいいんだけど……。

俺が逃げるのに間に合わなくて跳ねられひきつたんだよねえ……いやあ、あの時はマジで痛かったなあ……。

想像を絶する痛みつてあんな風なことを言つんだなーそれで、魂だけの存在になつた俺を勝手にこんな訳の解らん場所に連れてきたのが今踏んづけてる「コイツ（イケメン神）。

何でも、本来なら俺が死ぬんじゃなくあの子が死んで「コイツの玩具的な存在になるとかほざいてたんだよー別の世界に転生させて自分が楽しむとかなんとか……

流石にそれ聞いて俺もぶちギレちゃつてねえ……

イケメンを殴り飛ばして、今下敷きにして踏んづけてるのよーえ？神をぶん殴れるのかつて？？

そこはほら、何となく出来ちゃつたって事で

「そんでも？俺を殺しといて詫びのひとつもないのかなあ？？」

「「「めんなさー」「めんなさー」「ホントに反省しますっ！だからこれ以上踏むのやめてえええつー……あ……だんだん気持ちよくなつてきた……」

うわ、性格破綻の上にドミかよ……引くわあ……これ以上踏んで「コイツが今みたいに変態になるのは御免だからそろそろ勘弁してやるか……。

「ハアツ…………ハアツ…………ハアツ…………あ、危うく変な世界に旅立ちかけたじゃないかあつ……！」

「いや、やの前に躊躇の止めたんだからありがたく思えよ?」

「…………ムウウッ…………まあいいさー君には僕の玩具として過ぎないよー…………異論は無いねー?」

いや、ていうか

「異論ありまくろに決まつてんだろ」

パンツ！！

「ふきやつ！？」  
君はさつきから僕に虐待してくるが、一体なん  
の権限がつ！？」

権限……………決まつてゐるだらうが……………！

!

ドゴツ！バキヤツ！メギヤツ！ガギイツ！-

「……………？」

「ふう……ちつとはスッキリしたかな……」

「う、う、う……」

ひとしきり殴り終えてイケメン神から離れる。  
まあ、無事なところがないぐらい顔面が腫れ上がってるけどな（笑）  
さて、と……そろそろ本題に入らうかね……

「んで？俺を殺したんだ、それなりの誠意つてやつを見せてもううかねえ？」

「ひ、ひいいっ……ヤ、ヤ、ザ……」

「だあれがヤ ザだつてえ？？」「なんいたいけな一般人を捕まえといて……」

「す、すいませんでした……お、お詫びと言つてはなんですが……貴方を別の世界に転生とこう形で生き返らせたいと思います、…

…」

「転生、ねえ……？」

「どんな世界に転生されるつもりなんだ？……あんまり血生臭いのは勘弁だぞ？」

一応、平和主義者（え？）なんだから……  
……今、「何処が」とか思つたやつ……ちょっと裏通りに行こ  
うか？

「だ、大丈夫です……ちょっとバトル的な要素はありますけど  
……」

……何か、後半部分おかしな言葉が聞こえた気がしたが……ま  
あいいか。

「そんで? どの世界に送るつもりですか?」

「HISとこう世界に送るつもりですか?」

「HISってなんだ?」

「HISを知らないんですか? 今、ライトノベルとかで有名ですよ

「いや、知らんし……軽くでいいから説明しやいよ」

「解りました…… HISとこうのは……」

何か長い説明だからある程度省ぐが……

（インフィニッシュストラトス）  
HISとか言う女性しか扱えないパワードスースのせいだ「女尊男卑」  
の世界に男で唯一 HISを扱える主人公を舞台に活躍する学園ラブコ  
メなんだそうだ。

うん、激しく面倒事な気がしてならないなあ…………

「その世界に俺を送り込むと…………？」

「他にも魔法少女リリカルなのはの世界や魔法先生ネギまの世界もあつますが…………？」

「…………どれも嫌な予感しかしないなあ…………わかったよ、その工の世界にするよ」

「わかりました…………それでは、転生することあたって能力の特典を付けさせていただきます」

「特典か…………何でもいいのか？」

「僕に出来る」となり…………何でも…………

まああんまり無理難題を押し付けるのも可哀想だし、何個かに絞るかな…………。

「…………Hをテックマンブレードにして、資金、身体能力、知識をチートしてくれる

「…………それだけでよろしいのですか？」

「ほお…………なら他にもブレードの変身制限解除も付けてくれ…………今はそれぐらいかな」

「…………わかりました…………そしたら、サービスでコレも付けましょ」

イケメン神が手をかざすと、そこに現れたのは青を基調としたロボット……。

「ラーサ…………」

原作でのブレーダーのサポートロボのペガスだった。

「付けるのはありがたいけど、これは田立つんじゃないかな?」

「それは大丈夫です…………」のブレスレットにペガスを収納すれば……

イケメンの持つブレスレットが光り、ペガスが中に収納された。便利だなあ…………。

「あとは、コレを…………」

そう言って俺にエメラルドに輝くクリスタルを手渡してきた。

「テッククリスタルか…………これが無さやあな…………」

「試しに変身したらどうです?」

そうだなあ…………叫ぶのは恥ずかしいけど、やつてみるかね…………。俺は勢いよくテッククリスタルを上に掲げた…………。

「テック・セッタアアアアアアツ…………」

テッククリスタルが輝きを放ち、徐々に俺の体を覆っていく。  
そして、そこに立っていたのは白と赤を基調とした装甲を持った宇宙の騎士……

「テックマシン、ブレード……」

……ちゅうと快感と痺りてしまつた俺は懲へないと痺り……。

「生でテックマシンブレードを見るとなかなか凄いですねえ～」

「まあ、俺が好きなアニメだからな……それで、解除するとあせりうしたらいいんだ?」

「ああ、念じればもとに戻りますよ。」

言われた通りにもとに戻ることを念じたら、体が光り、元に戻った。

「まさか、俺がテックマシンブレードになれるとは思わなかつたな……」

俺がそんな風に感慨に耽つていると、イケメンが口を開いた。

「言ひ忘れましたが、ボルテックを使うときはエネルギーを貰いますからね?」

まあ、それは仕方無いな……

「では、送りますけど準備はいいですか?」

「ああ、やつてくれ……」

「じゃ、次の人生では気をつけて」

ガコツ！

俺の足元に床が開き、俺の体が落下していく

こうして、俺の第一の人生は始まつた。あのイケメン、

## episode - 0 いきなり死す！？そして授かる宇宙の騎士の力（後書き）

駄文は駄文なりに細々と書かせていただきます

episode · 0 · 5 原作開始前（前書き）

連投ですが……………何だ、これ……………orz

酷すぎるにも程がある……………

皆さん、如月 直哉です！俺が生まれ落ちて早くも十五年になりました……。名前も前世と一緒にたたのでそこは嬉しい限りです。

その間に色々なことがありました……。

赤ん坊の頃には満足に言葉も話せず、母親の母乳で過ぎてきたのが懐かしいです……。

あれ？ 何で涙が出てくる？……別に精神年齢二十歳過ぎの人間が母乳でしか食事が出来なかつたことに泣いた訳じゃないです！ええ、断じて……！

話を進めましょう幼稚園から小学生になった頃、同じクラスの女の子が苛められてるのを目撃しました。いつの世の中にもああいつのつているんだなあ……。あ、誰か止めたみたいですね？ でも多勢に無勢で負けそつだし……。

……面倒なのは御免なんだけどなあ……。

「お~い、何してんの？……もしかして苛めえ？？」

「何だよ、如月つーお前もコイツら庇うのかよつー！？」

いや、苛めかって聞いただけでしょ……。

チラと苛められてた2人を見ると何やら2人とも俺を見て呆然としてた。

あれ？？この子らって……織斑一夏と篠ノ乃幕？

……いやいや、まさかこんなところで主人公とヒロインの一人に会うなんて……ないわあ。

何で俺が主人公とヒロインの存在を知ってるかつて？……あのイケメン神が俺が生まれた時にこの世界の情報を教えてくれたんだよ。

全く、ありがたいやら迷惑やら……。

「おいつ！聞いてんのかよ、如月！？」

「ん？……まだいたの？」

「なつ！？で、テメエツ！？」

バキッ！

「あ……」

「ゲフツ！？」

やつべべ……ついノリで殴つちまつた

そこからはもう織斑や篠ノ乃も入り交じつた大乱闘の騒ぎになつて  
大変だつたなあ……。

え？ それからどうしたつて？？

騒ぎに乘じて織斑達を連れて逃げましたが、何か？

「あ、ありがとな……おかげで助かつたよー。」

「あ、ありがとー。」

「まあ、気にはんな……成り行きで助けたようなもんだしな

うん、ホント成り行きだつたしね。

「俺は織斑一夏つていうんだ！ それで、~~わけ~~ひかせ

「篠ノ乃幕だ……やつときはホントにありがとー」

「いや、そんな愚まらないでいいよ……ああ、俺は如月直哉だ。よ  
ろしくな、一夏、幕」

「「ああ、いわいわー。」」

その日から俺達は毎日つむむ様になつた。

それにして、幕さんや……一夏に手を握られたぐらいで顔赤くした  
らの先、どうなる事やら……。

一夏達とつむむ内にその姉である「織斑千冬」さんとも知り合えた。

つか、あの人どんだけ強いんだよ…………。

高校生だつてのに大の大人が数人かかつても勝てないつて…………。  
それに超弩級のブラコンである。

何かしらあることに一夏、一夏と…………。

本人は隠し通してるつもりなんだらうけど、俺からしたら引くぐら  
いの勢いだ……！

まあ弄つたら弄つたで面白いことになりそうだけど……（笑）  
（直哉は自分でチートな身体能力を授かってる事をすっかり忘れて  
ます）

後は幕の姉である「篠ノ乃束」。

こつちもこつちで色々とおかしい…………。

天才だか天災だか言られて、まず社交的な人間じやない。  
身内や親しい人間にしか興味を持たない…………。

性格破綻者、社会不適合者という言葉がしつくづくるが…………。

いわゆる変人だ。

俺も人の事は言えないけどね（笑）

だけど、少なくともあの女よりはマシだと自負できるね！

そして、ISの開発者でもあり、「女尊男卑」の世の中を作った張  
本人だ。

何でこんな世の中にしたのか、理解に苦しむなあ…………

けど、そんな俺たちにも別れの時が訪れた。

幕が一身上の都合で転校する事になつたんだ……。

その都合と言うのが、幕の姉である、「篠ノ乃束」。

この天災女が原因である。

その時の幕の顔は忘れられなかつたなあ…………。

一夏と離れたくないといつ一心つて感じだつたし…………。

まあ、一夏も一夏で思うところがあつたんだろう。幕が去つた途端に俺がいるのも構わずに号泣したんだから…………。  
俺？……まあ幕が去つた事に関しては悲しいけど、また会えるというのを知つてゐるからそこまではいかなかつたな。  
んで、幕が去つたと思つたら次は俺の番だつた。  
小学校を卒業したら旅に出るつもりだ。

つつても、俺の場合は自己中な理由だけだ。

年齢的にはともかく、中的人的に考えて中学はないわあ…………という理由と色々と世界を見て回りたいという理由だ。

それでもやつぱり一夏は泣いた。

まあ多少は罪悪感はあつたが、それでもこれだけは譲る気はなかつたが。  
両親にも許可を取つてあるわけだし…………。

そこで時間は進んで三年後……。

episode - 0 · 5

原作開始前（後書き）

次回は設定です

## 如月直哉の設定（前書き）

設定です

## 如月直哉の設定

名前	如月 直哉
年齢	15（転生前は二十歳の大学生）
身長	175センチ
体重	65キロ
CV	森川智之
趣味	人の弄れるところを見つけ出し、じょん弄る。
特技	手先が器用なため、纖細な作業を樂々とこなせる事。
備考	<p>子供を助けたところ、イケメン神に誤つて殺されてしまつたが、イケメンとの平和的な話し合（と言ひ名の一方的な虐待）によってISの世界に転生した男。</p> <p>自らの娛樂の為に子供を殺そうとしたイケメン神をお説教（と言ひ名の暴力）によって鎮圧し、特典を付けてもらつた。</p> <p>基本的には温厚かつ優しい性格だが、弄れる対象がいたらドムードとなる。人の好意にはそれなりに敏感で一夏を慕うヒロイン達を生暖かく見守つている。</p>

## ISI ブレード

待機状態 エメラルドのネックレス

解放時

白と赤を基調とした全身装甲「フルスキン」

というかまんまテッカマンブレード。

タイプは強襲突撃型。

左腕に小型のシールドを装備

原作のテッカマンブレードでは装甲も高く、超音速の機動性を有していましたが、イケメン神がIS用に劣化させ、装甲は若干薄いがそれを補つて機動性が高く近接戦闘を主体とした戦い方を得意とする。

主武装は肩のファンからランサーを排出し、敵を切り裂くテックランサー。

エネルギーを消費させ、装甲を変形させて敵に超高速で体当たりするクラッシュ・イントルード。

両肩が開き、そこから放つ必殺技のボルテッカは威力が高い分、シリードエネルギーを多大に消費し、連発は出来ない。

原作にあつた、変身制限はなくなつており時間は無制限となつてい

る。

シールドエネルギーは680

サポートエス　ペガス

待機状態　青色のブレスレット

ブレードが呼ばば待機状態から青と赤を基調としたロボットとなり、  
ブレードをサポートする。

主武装としては手の指から発せられる無数の小型ミサイル。

ブレードを乗せてブレード以上の機動性を有して飛行する事も可能。  
ただし、出番は後になる。

## 如月直哉の設定（後書き）

次は……次は…… HIS 学園入学です！

ここに、皆様にアンケートです！

ヒロインを誰にしようか… 作者は未だに考えておりません…… その場の勢いとノリでこの作品を作っていますの……

と言つわけで、皆様のアンケート結果でヒロインを決めたいと思います。

自分の腕はまだまだ未熟なので、上手く恋愛描写が書けるか不安で心臓が破裂しそうですが、そこは何とか頑張ります。

と言つわけで、アンケートお待ちしております。

## episode-1 IS学園入学！（前書き）

駄文の完成です！

色々と言いたいこともあるでしょうけど、生暖かな視線で見守って  
あげてください m(—)m

## episode・1 IIS学園入学！

皆さん、こんちわ……ダークな感じですみません……如月直哉です……

何で前と違つてそんなに元気ないかつて……？

そりやテンションもダダ下がりですよ！  
俺がIIS使えるのがバレて日本に連れ戻されてIIS学園とかいう訳の解らん場所に來てるからですよ！

しかも……

「…………#」

門の前に腕を組んで待ち構えてるスース姿の鬼もいらっしゃる……  
アラゴン

ボンツ！ドガツ！

「どわつ！？あ、あぶねえ……」

何か俺目掛け飛来したものがあつたので、反射的に避けた。

何だこれ……つて出欠簿じゃねえかつ！

しかもコンクリの壁に刺さつたまんまだし……。

「ちつ……##」

しかもあからさまに舌打ちして、笑顔のまま青筋増えてるし……  
仕方ない、観念しよう……

「やつほ！久しぶりですね……千冬さん」  
ガスッ！

「……笑いながら殴るのは如何なものかと……」

「お前が変な」と考えなければ殴りはせん

「……この人はいつの間に読心術なんて恭<sup>マツコ</sup>出来たんだろう……」

「まあ何はともあれ、お前……」の3年の間何処で何をしていた……？」

「……言わなきゃダメ？」

「素直に言えば説教は無しだが？」

「ん~」

「そこで悩むか、普通……？」

とは言え、言つていいものかなあ……。  
まあいつか……別に困るわけでもないし

「いやあ、世界の最果てまで行つてまして……」

「何処の事を言つてるんだ……まあ、言いたくなればそれで構わん」

「……言えるわけないよなあ……アフガニスタンで戦争屋相手に

大暴れしてたなんて……

まあ、それはそれとして……

「千冬さん、何で「こんなトコにいるんすか?」

「決まってるだろ……私がこのエラ学園の教師だからだ!」

教師?この人が??.家事が一切出来ずに自分の身の回りの事を全く気にしない、嫁の貰い手が全く無いこの「女としてそれはどうなんだ」と言つ疑問を真っ向に受け止めても余裕綽々のこの人が……教師!?

「…………」

「な、なんだ……その世の中に絶望した的な目は……」

いや、だつて……

「それは流石に嘘でしょ……千冬さん、遂に嫁の貰い手無いからつてそんな虚妄に走るなんて……!」

「…………お前が私の事をどんな風な目で見てるのか、よくわかつた…………だが、まじつ事なき事実だ」

神は死んだ………… o r n

「それと、ijiでは私のことは織斑先生と呼べ」

「わかった、織斑（極度のブラン）先生」

スパンッ！

「私は身内の事でからかわれる事が嫌いなんだ……」

「いてて……からかわれるネタをたくさん持つての方が悪いでしょ？」

「ほお、まだ足りない様だな……」

千冬さんが出欠簿を振り上げよつとするが、俺は手で制する。

「まあまあ、落ち着いて下さって……弟を溺愛する余り、それをネタに×××しちゃう織斑先生？」

「…………何で知つている…………」

「企業秘密 さて、それじゃ、行きましょうか？」

俺は真っ赤になつて悶えてる千冬さんを放つておいてエリザベス園に足を運んだ。

「そういや、一夏もここにいるんだつけか……いやいや、面白くなつそうだ！」

そして、教室前に千冬さんに連れられてきた。でも、クラスメイトって女ばっかなんだよな……。居心地悪そう。

「では、私が先に入るから呼ばれたら入ってこい」

「りょーかいっす」

教室の中に千冬さん、いや織斑先生が入つていった。途中、「ゲエツ！ 関羽！？」的な台詞が聞こえ、それを黙らせる為になにかを叩く音も聞こえたが、気にしないことにする。さて、インパクトある自「」紹介しようかね……

「もう一人、転校生がいるのでな……入つてこいー。」

おや、お呼びがかかつたな……。  
わたくして、行くかな……。

ガラガラッ！

「えつ……」

「つわ……」

「わああ……」

等々、黄色い声が聞こえてくる

「さあひー・シリ・ひまわりーだよひー・トウヒヘンねつー・」

あの某ウォルトさんで有名なミッキーだからー（ちゃんと声も變えています）

八  
八  
八

スパンツ!

痛いなあ……何をするんだい！？

「ふざけるのも大概にしろ！お前は真面目に自己紹介も出来ないのか！？」

「至りて眞面目なの」云々

仕方ないので、被り物を取る。

あれ？？アソコにいるのは幕かな？

髪型も昔と変わらないのに、姉かあんななのに、姉に関しては至って真面目…………。

「おい、授業の時間もあるんだ！早く自己紹介しおう

「ああ、はいはい…………皆さん、初めまして。如月直哉です。世界で2人目の男のI.S操縦者とかで紹介されました！」

世界で2人目の男のES操縦者とかで紹介されました！

「その織斑一夏と篠ノ乃幕とは昔馴染みなので歸れん、よろしくお願ひします」

最後は眼鏡をかけた童顔巨乳の先生にウインクする。

תְּמִימָנָה - ? / / / / /

うん、至って真面目な自己紹介だな！

織田先生が頭抱えてるにと  
氣にしない方向で！

さて、これからの中園生活が楽しみになつてきただかも…………！

「…………もついい、如月は織斑の隣の席だ……時間も無いから早く座れ」

「……やねじや」

いつまでも呆けてたら……  
てなわけで、一夏の傍に近付くとまだ呆然としている一夏がそこにいた。

# スパンツ！

「うつなるわなあ……。

「ボケッとして無いで早く授業の準備しろ」

「ううう……わ、わかつたよ千冬姉……」

「スペアーンッ！」

「織斑先生だ、馬鹿者」

「ん……やつぱ生で見る漫才は違うね！」

まあ後で一夏に色々と聞かれそつだから、覚悟はしておぐかね……

episode-1 IS学園入学！（後書き）

次回はセシリア登場です！

アンケートの方はまだ受け付けてます！

## episode - 2 イギリス代表候補生セシリア・オルコット（前書き）

連投です。

色々と突っ込みたいところは満載ですが、生暖かい目で見守ってください

## episode・2 イギリス代表候補生セシリア・オルコット

皆さん、こんにちわ！

前のダーク状態から何とか復帰した如月直哉です。

ですが、今は別の問題で頭を抱えています。

その原因是……

「ちょっと！聞いてます、貴方！？」この私が工Sの知識を無知な貴方にお教え差し上げようというのに……！」

そう、このドリル女……イギリス代表候補生の「セシリア・オルコット」がキーキー金切り声を上げて喋つてるからだよ……。

何でこんな事になつたかつて？

それは数時間前まで時間は遡るのだが……。

「おい、直哉！久しぶりじゃないか！」

「よひ、一夏……相変わらず間が抜けてる顔してんやあー。」

「お前の口の悪さも相変わらずだけどな……」

自己紹介が終わって一夏の隣の席に着いたら向こうから話しかけられた。

全く、変わつてなくて安心したよ…………ん?変わつてないってことは……

「ちょっとといいか?」

そんなことを考えてたら俺達に声がかかった。

「…………… 篇?」

一夏、その間はなんだ?

ひょつとして思い出せなかつたのか?

髪型も昔と何ら変わつてないのに……。

体型は…………… 女になつたね、篇……………。

「どうしたんだ、直哉は……?」

「ああな…………屋上でいいか?」

「あ、おひ……」

俺が幕の体型の謎を考へてる内に2人は屋上に行ってしまった。

何だよ、つもる話なら参加させようなあ……………。  
とか考へながら俺は2人の後を追つていった。

屋上に向かつた所、2人は無言のまま対面していた。（直哉はコツソリと扉に隠れて様子を伺つてます）

「…………」

「…………」

（何か喋れや、初々しい中学生カツプルじやないんだから……）

俺が内心で2人にイライラしていたら、一夏に動きがあつた。

「あ……久しづりだな、幕。でもすぐにわかつたよ

「な、何故だ……？」

（嘘つけや、お前声かけられてちょっと黙つてたじやん！？）

「髪型も変わつてないし、忘れるわけないだろ……お前は俺の……」

「…………」

（おつ！何だ何だ？いきなりコクるのか？お兄ちゃんはさういつの人大好きだぞ？幕もスンゴイ期待の田で見てるし……）

「幼馴染みだからな！」

「ゴンッ！（直哉が扉の角に額を打つた音）

「ん？ 何か聞こえたぞ？」

（そ、そうだった……あのバカ、某闇の皇子様と同等かそれ以上の  
鈍感だった……）

「そ、そりゃ……」

（あ～あ、籌もめっちゃ残念そうにしてるし……何でそこだけは  
成長して変わつてなかつたのかなあ、一夏は……）

「…………」

「…………」

またもや2人に沈黙が走る。  
だから何か言えつて……！

「…………そ、それにしても筹、剣道で全国大会優勝したんだってな  
？」

「な、何でそれをつ！？」

よつやつと一夏が口を開いた。  
にしても、全国大会優勝があ…………世界旅してたからそりゃう情報  
は疎くなつてたなあ…………。  
およ？ 筹も顔真っ赤にしてるし…………。

「いや、新聞読んで知つたんだ。」

「何故新聞なんか読んでるんだ！」

いやいや、篠さん？

それは芸人真っ青の無茶ぶりだぞ、それ？  
あ、いけねえ……そろそろチャイム鳴るわー。

俺は2人にこれ以上進展はなさそうと読んでこの場を後にした。

そして、授業中の事だ。

山田先生が教鞭を振り、ISの基礎知識に関して講義している。

正直、眠くなるが……

「…………」

背後に控えていらっしゃる鬼（超弩級のブリコン）が監視してて眠る  
に寝れない……なに、この地獄……？  
しかも背中にビックシリ視線感じるし……。

仕方ない、後々めんどくなりそうだから聞いてるフンじとか……。

「ここまで何かわからな」とこりはありますか?」

「こりで質疑応答の時間かな?」

つか、一夏の奴……頭から煙出てるけど、大丈夫なのか?」

「はい、山田先生!」

「こりで一夏が手を挙げた。まあ解らなかつたら聞けつて授業の畠頭に言つてたもんな。」

「はい、織斑君!こりか解らなといとこり、ありましたか?」

山田先生は頼られてるのが嬉しいのか、ちよつと上機嫌だ。  
ん~……そんなどこやかにならんでも、と思つるのは俺だけか?」

「全部、わかりません……」

「え……?」

「ぬ? ?

「せ、全部、ですか……?」

や、流石にその答えになるとは……俺も予想外だつたなあ……。

スパーンツ!」

とか何とか考へてる内に織斑先生の出欠簿が一夏の頭に落ちた。

「織斑、入学前に渡された参考書を見てないのか？」

「……古い電話帳と間違えて捨てました」

「 spaanss !

うわあ、2度目の出欠簿アタックだ……。  
地味いに痛いんだよな、アレ……。

「そこで他人事みたいな顔してる如月！」

「え？俺？？」

何か知らんけど、俺も指名された。  
ご指名は勘弁なんだけどなあ……。

「お前は参考書を読んだのか？」

「読むわけ無いでしょ？あんなクソめんじくそこもの」（即答）

「ボンツ！バシイツ！」

「いきなり出欠簿で人の頭をパンパン殴るのはどうかと思いますけどねえ？」

「必読と書いてあつたのに何故読まなかつたんだ？」  
ギリッギリッ……ギリッギリッ……

出欠簿を掲げる力と振り下ろされる力が拮抗している。つか、軍隊形式でやられてもなあ……。

「ていうか、山田先生が困つてゐるから早いことに進めません?」（一）  
（二）（顔で力を入れている）

「お前の頭に振り下ろすまでは進めんよ?」（一）（ちらも笑顔だが、額に青筋をたててゐる）

やれやれ、仕方ないなあ……

「（小声）……織斑先生が高校の時にやらかした失敗談、皆に聞かせましょうか?」

「わあ、山田先生ー早く進めよ!」

「えつー? は、はい……」

いやあ、お願い（脅迫）つしてしてみるもんだね!  
ん?? 一夏、何聞きたそつにしてんの?

後で教えてあげるから今は授業に集中しなつて!

とまあ、そんなことがあった次の休み時間の事。

俺、一夏は教室でダラダラと駄弁つてた。

そんな時……

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「ふわああああ～……」

俺達が振り返ると、そこには金髪ロールの女が立っていた。

なんか、見下されてる感満載だなあ……。

知つたこつちやないけどな

何処の国に行つてもIISのせいで高圧的な女が多かつたが、IISでもそんな感じっぽいなあ……。

「一夏、ジ指名みたいだぞ？」

「いや、俺は知らないけど……直哉じやないのか？」

「俺にこんなドリル女に知り合ひはいないぞ？」

「失礼ですわね！誰がドリル女ですかー！」

「誰つて……そりゃねえ……

「俺たちの前方1メートル内にいる金髪の偉そうに突っ立つてる君  
だけど？」

俺は懇切丁寧に皮肉で答えてあげることにある。

正直、この手の類いの人間に関わるとめんどくさい」とこの上ない  
からである。

「まあ！なんですの、そのお返事は？私に声をかけられるのも光栄  
なのですよ？……それ相応の態度と言つものがありますよ？」

あ～、やつぱめんどくさい類いの女だわあ……。

シカト」といて寝ようかなあ……。

「悪いけど、俺達君が誰なのか知らないんだけど？」

「同じく。」

「私を知らない！？」の「一夏、俺寝てるから授業始まる前に起こ  
して～」なつ！？」

俺はそのまま寝る態勢に入りつつするが……。

「このセシリ亞・オルゴットを知らない！？」イギリス代表候補生  
であり、入学主席のこの私を！？」

「ああ！全く知らん！」

「……」

「相変わらず寝るの早いなあ……おい、直哉？寝る前に教えてくれ！」

「……何だよ、寝に入りかけたってのに……」

中途半端に起されたのは御免なんだけどなあ……。

「代表候補生ってなんだ？」

一夏のそれを聞いて回りが騒がしくなり、俺の眠気が完全に醒めてしまつた。

「ていうか、一夏……。

「それぐらいは自分で調べろって……まあ、いつか……国を代表するエリ操縦者に選ばれるかもしない奴らの事だよ。まあ、要するにヒーリー（勘違い）だよ。俺は知ったこっちゃないけどな……」

俺はセシリアに向き直り、質問した。

「んで？……そのヒーリー（勘違い）イギリス代表候補生が俺達に一体何の用で？」

「本来なら私達選ばれし人間と貴方達の様な人間がクラスを同じになること事態が奇跡……幸運なのですよ！」

そんなことを言いながら指を突きつけてくるセシリア。

つか、人を指差すな……へし折るぞー？

「あーはーはー、よかつたよかつた……じゃ、そういうことで」

話すのもめんどくさいので強引に話を切り上げようとしたのだが、向こうは聞かず、今度は一夏に話しかけていた。

「大体、貴方 IJS について全く知らないくせによく、IJS の学園に入されましたわね？唯一……いえ、2人でしたわね？少しくらい知的を感じさせるかと思ったのですが、どうやら、見込み違いの様でしたわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

一夏、律儀にそんなんめんどいの相手しなくてもいいのに……。

「ふん……まあでも、私は優秀ですから貴方達の様な人間にも優しくしてあげますわよ？泣いて頼むのであれば教えて……」

「なあ、直哉？IJS の知識に関して放課後、教えてくれないか？」

「ええええええ……」

「そんなんめんどくさい顔しないで頼むよ……」

「…………今度のメシ、お前の『チナ？』

「わかつたよ、好きなの頼んでいいから……」

「んじゃ、教えてやるよ……」

俺達はそのまま教室を出ようとしたのだが……。

「ちよっとお待ちなさい……」

まためんどくさいのが絡んできた…………。

「」で冒頭に戻る訳なんだが…………。

「めんどくさいなあ…………詰まる所、お前さんは優秀でエリートだから泣いて膝まづいて教えを乞わせよ」としてるんだろ？  
そつ言つのは余所でやつてくれ…………」

俺はめんどくさい100%の顔で言い放つたが、セシリ亞はそれが  
気にくわなかつたようだ。

「なつー？あ、貴方は入学試験で唯一、教官を倒した私にそんな口  
を…………」

「あ、それなら俺も倒したぞ？」

横から一夏が口を挟む。

「え、教官倒したんだ……。

「やるじやん、一夏」

「でも、アレを倒したと言つてこいのか？…………でも、直哉はどうだ  
つたんだ？」

「いや、俺入試すら受けでないし…………」

「は…………？じやあビリヤツで入学したんだ？」

「とある国でエリヤ使つてのバレで3日前にそのままいつたに強制  
連行だよ。」

「……そっか、お前小学校卒業して旅に出たんだもんな」

俺達がそんな話しに花を咲かせていると顔を俯かせ、肩を震わせて  
いるセシリ亞の姿が目に入った。

「…………ただ一人、教官を倒した、ねえ…………大方、女子の中でつて事がねえ？…………笑えるオチだなあ…………」

「上」

いやいや、そんな屈辱かつ羞恥に染まつた田で睨まれても……

そんな時、休み時間終了のチャイムが鳴り響いた。

「は、話の続きを、また改めて……よろしいですわね！？」

「いや、やめしやないにしやれるから」

出来れば2度と関わらないでくれ……おもに俺の精神的な疲れのために……

織斑先生の授業になつて俺のそんな願望は脆くも崩れ去ることはまだこのときの俺は知らなかつた。

## episode - 2 イギリス代表候補生セシリア・オルコット（後書き）

次は決闘まで書けたら書きたいなあ……。

アンケートもまだまだ募集中です

## episode - 3 クラス代表決定前の出来事（前書き）

またもやグダグダです……色々と突っ込みたいところは満載ですが、  
生暖かい目で見守ってください

## episode - 3 クラス代表決定前の出来事

「あ、貴方っ！私の国を侮辱する気ですの？…？」

「初めに侮辱したのはそっちだろ！…？」

「一夏とセシリアがギャアギャア罵り合つてゐる……。  
つか、人の近くで喫かないでくれ……。」

「どうも、IS学園何ぞに入れられて気分&テンションダダ下がりの  
如月直哉です……。  
つか、何でこんなことになつたんだろ……？」

3限目の授業が始まる前に織斑先生が突然こんな事を宣つた。

「ああ、言い忘れていたが一月後に行われる「クラス対抗戦」の代表と副代表を決めようと思う。」

代表者と言つるのは代表戦のみではなく生徒会会議や委員会の出席、

まあ所謂クラス長の事だ。

副代表は代表者の補佐を行う者の事だ。一度決めたら変更は出来んからな？

よく考えて決めろ！

なんて事を言つてきた。

まあ、俺はそんなもん面倒だからやるつもりなんてないけど……。

「はい！私は織斑君を推薦します！」

「あ、私も！」

「つてええつ！俺！？」

哀れ一夏……。

ある意味で寄せパンダみたいなモンだから面白がつて推「私は如月君を推薦します！」つ俺もかいつ！？

「ふむ、推薦者は織斑と如月だな……他に誰かいないか？」

今、明らかに織斑先生の顔が愉しそうだつたぞ！？

ちくしょう……明日の朝、楽しみにしてろよ？（ちなみにこの時、千冬は何か悪寒を感じ、密かに身体を震わせたという……。）

バンッ！

「待つてください！納得がいきませんわっ！」

俺が織斑先生に対して軽い意趣返しを考えていると、机を叩いた音と同時にそんな声が聞こえてきた。

先程、散々喚きまくつて惨めに撤退していったドリル女ことセシリ亞・オルコットだった。

まあためらひい事にならなきやいいけどなあ……。

「そのような選出、私は認められません！男がクラス代表なんて恥さらしにも程がありますわ！このセシリ亞・オルコットにその様な屈辱を味わえと仰るのですか！？」

（いや、ならお前が立候補しろよ……。

喜んで譲つてあげるから）

なんて思つた俺は悪くないと思つ……。

「クラス代表は実力の頂点に立つものがやるべき事……つまり、代表候補生である私がやるべき大役ですわ！」

（だから立候補しろって……俺だつてこんな面倒な事は御免なんだから……）

「それに、文化も後進的な国に滞在しなければいけないことは私にとっては耐え難いことですわ！」

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ……世界一料理が不味いので何年覇者なんだ？」

セシリ亞の金切り声に被さつて一夏の声が聞こえてきた。  
あ～あ、ホントの事言つちやつたよ……。

とまあ、ここにで冒頭に戻る訳なんだが……………正直、大元を  
連れはそこで愉しそうにニヤついてる「ハリソン」がいけないんじゃな  
いか…………？

つか、止めるよ？山田先生がアワアワ言つてるぞ？

バンッ！

再度机を叩く音がして、そちらを見るとセシリアが一夏を睨んでいた。  
その目は血眼を侮辱された悔しさと怒りにまみれていた。

「決闘ですか！」

あ～ら～、一夏のやつ地雷踏んづけたなあ…………。  
ま、他人事だし一夏の自業自得だから別に…………。

「そこ」の如月とか言つ男共々、纏めて潰して差し上げますわ！

……飛び火が此方まで来たし…………。  
また、面倒な…………。

「……俺、特に関係なくない？つか、明らかに巻き込まれたクチだ  
よね？」

「今のセシリアに何言つても無駄だと思つよ～」

俺の隣にいたクラスメイトAさんが俺に同情するかのように肩を叩いた。

「上等じゃないか！そっちの方が分かりやすくていいぜ！」

一夏も一夏で単純に乗せられるなよ……。

何か、昔よかバカになつてゐる氣がするんだけど?

「まあ、やるからにはやつてやるナビ…………一夏はともかく俺はビのくらいハンデいるんだ?」

俺が独り言で言つたのが聞こえたのか、セシリアが尊大に言い放つた。

「あら、私に勝てないからつていきなりハンデの要求ですか?」

「何か、勘違いしてゐみたいだなあ…………。  
でも、弱いものいじめも好かんし言つてやるか。

「いやいや、お前!」ときなりチヨロいから俺がどんだけハンデ付けようかつて……」

それを言つた瞬間、クラスの全員（一夏と筹を除く）が一斉に笑い出した。

「あ、如月君……本氣で言つてるの?」

「男が女より強かったのつてもつ世の話なんだよ?」

「まあ好き勝手言つてくれちゃつて…………#

「まあ、いるかどうかはこれ見て判断してくれ」

俺は胸元に引っ提げているINSを織斑先生に放り投げた。テック・クリスタル

「…………何のつもりだ？」

「俺のEHS使用時間を見ればわかるんじゃないすか?…………俺の言ったことがどれだけの事か、ね…………」

「…………わかった、これは預かる。私が戻るまで各自、自習だ!」

そう言って織斑先生は山田先生と教室を出た。  
…………鬼の居ぬ間に睡眠学習でもしようかね…………

数十分後、織斑先生と山田先生が戻ってきた。  
2人とも、顔面蒼白だけど…………。

「オルコット…………悪いことは言わん、ハンデを付けてもらえ。」

「なつー?お、織斑先生つー?」

「どうやら俺の言った意味が正確に伝わったらしい。  
まああの使用時間見たら当たり前か…………。」

「如月相手じゃどう足搔?」  
「お前では勝ち目が一切無いから言つ

てるんだ

「へ、そんな……お、お断りしますわっ！まだ戦つてすらいない  
のでー！」

「…………一応、忠告はしてやったからな…………後は自己責任だ……  
……如月、後で話がある…………放課後にアリーナに来い。」

俺のＩＳを放り投げて織斑先生はそう言った。

放課後つて一夏の勉強あるんだけど…………まあ、いつか……

……一夏も誘つてやれば……

そんなことを考え、俺はまた眠りについた

（余談だが、寝ている直哉の頭に出欠簿が振り下ろされたのは言つ  
までもない）

## episode - 3 クラス代表決定前の出来事（後書き）

次回は模擬戦です……

相手は…………おつとつとーまだ言えません（笑）

次の話で千冬と真耶の顔面蒼白の意味がわかると思います。

アンケートはまだまだ募集中ですので、気軽に答えてみてください。

episode - 4 模擬戦兼、入学試験開始！そして……（前書き）

おはようございます m(—) m

仕事の休憩中に投稿します。

戦闘描写、ヘッタクソだなあ……

## episode - 4 模擬戦兼、入学試験開始！そして……

織斑先生に呼ばれ、アリーナに向かつた俺達

「なあ、俺も一緒にいいのか？」

今回は一夏も御一緒です。勉強教えてやる約束だつたけど、俺が呼び出し食らつたと言うのもあり、勉強が出来なかつたのでせめてもの代案といつて詰じやないですが、付いてきてもうつじにしてしまつた。

「いいんじやないか？……もしああだこうだ言つてきたら俺が黙らせるから」

「…………昔から千冬姉にズバズバ言えるのつてお前か束姉ぐらいだよなあ……」

変なところで感心しないでくれ、一夏…………。

そんなことを話していたらアリーナに着いた。

そこで待つていたのは……

「遅かつたな、如月…………！」

ISスースを身に纏つた織斑千冬…………否、第1回IS世界大会優勝者であるブリュンヒルデ（戦乙女）と山田先生がいた。

「…………何故織斑がそこにいる？……如月以外は呼んでいないぞ？」  
「別にいいじやないすか……放課後は呼び出し食らつてコイツに勉

強教える」と出来なくなつたんすから……」

一応、俺は一夏がここにいる理由を話した。

元はと言えばおたぐりのせいでしょうに……。

「それじゃ、これから行動を考えれば一夏の勉強にもなると思いますよ?」

「…………まあ、いい…………如月、IISを装着しの……私が入学試験を兼用して相手になつてやる」

兼用つて…………ただ俺への意趣返しを理由にしてるとしか聞こえないんだけどなあ…………

「…………はあ、わかりましたよ…………てなわけで一夏、山田先生と一緒に観戦してお勉強だ」

「え…………ど、どいつことだよ…………ー?」

「鈍いやつぢやなあ…………今から俺と織斑先生が模擬戦やるからそれ見て勉強しろって事だよ!」

昔つから変なとこで二ブチン野郎だったが今もそれは変わらずだなあ…………。

良かつたのか、悪かつたのか…………ちょっと複雑な気分だよ……俺は。

「わ、わかつたよ…………けど、千冬姉相手にやれるのか?」

「わあ?…………やれるといまではやつてみるけど……」

織斑先生に向き直り、言い放つ。

「負ける気は更々無いね！…… テック・セッタアアアアアアアツ！  
！…」「

そして、テック・クリスターを上に掲げて叫ぶ。

俺の身体を緑色の閃光で包み込み、装甲が纏われる。……………閃光が  
止み、そこに現れたのは白と赤の装甲に身を包み肩の装甲が大型化  
しており、全身が鋭角化し攻撃的な印象を強くした騎士がいた。

「テックマン・ブレードっ！…！」

俺は名乗りを挙げて織斑先生の前に降り立つた。

「……………それが、お前のIISか……………まさか全身装甲とはな……………」

「ええ、俺のIIS（相棒）のブレードです……………」

俺は肩のファンからランサーを排出し、それを連結させて構えた。

織斑先生もIISを起動させて身に纏つた。  
あれは……………打鉄か。

お互に近接仕様つてとこかな……………。

「では、私も行くぞ！…」

「待たせたな……………まあ、

「始めますか！…」

ガギインツ！

互いに接近し、ランサーと刀がぶつかり合つた。

## SIDE 一夏

「す、すげえ……」

俺は2人のぶつかり合いを見て感嘆の声しか出せなかつた。隣にいる山田先生も同じのようだ……。

「き、如月君が織斑先生と互角に戦つてるなんて……」

そう、あのモンド・グロッソ優勝者である千冬姉と俺の親友の直哉が互角にやりあつてゐるのだ。

普段はふざけた態度をとり、面倒なことが大嫌いな直哉なのに……。

「…………戦いたい」

俺は自分でも気付かないぐらい見入つていて無意識に呟いていた。

直哉と戦つてみたい！

今までこんな風に考えたことなんてなかつた！

でも、2人の……直哉の闘いを見て思つてしまつた……

直哉と戦いたい！

そして、隣に立つて共に戦いたいと……！

SIDE 一夏 end

SIDE 千冬

強い…………！

ISの使用時間からしてかなりやれる奴だとは思つていたが、何とか斬り合つてみて実際にこゝまでやるとは思つていなかつた！

私とて世界大会で優勝した誇りがあつたから慢心していないと言え  
ば嘘になるが、くつ……中々楽しいぞ！

「どうしたー直哉つー？……もつと打ち込んでみろーー！」

「…………」

装甲で隠されているせいか、表情が窺い知れないがやつもこいつ思つ  
ていたら……！

ガキイツ！！

つー！得物同士がぶつかつたと思つたら私の刀の方が破損し、首筋  
に直哉の得物の切つ先を突き付けられた……！

くつ…………私の、負けか…………。

「ここの程度すか、ブリュンヒルデ？」

え…………？

ふと、直哉の冷めた声が響いた。

S H D E

千冬 end

SIDE 直哉

何と言つか……正直な話、拍子抜けだ……。  
世界最強と呼ばれていた千冬さんとやつた結果だ。

動きが正直過ぎる……。

いくらモンド・グロッソとは言えスポーツ大会の粋をでなかつたか

……。

これならアフガンの戦争屋の方が動きがよかつたな……。  
まあ千冬さんに関してはそれが原因じゃないだろうな……見たところ、打鉄が千冬さんの動きに付いていくてなかつたように見えたし  
な。モンド・グロッソで使用していた「暮桜」ならもつといい勝負  
が出来たんだろうけど……。

「打鉄程度で俺とやりあえると思われてたら心外すね……」

「……」

「だんまりかよ……まあいいんすけどね……」

俺はEISを解除して千冬さんに近付いた。

あ.....

俺に反応した千冬さんが弱々しく声をあげた。

「スンマヤン……偉そうなこと言つて……でも、」

「え？」

俺は千尋さんに手を差し伸べ、笑ってやる」と言いました。

「入学試験はこれで合格つすよね?」

つ / / / / / . . . あ、ああつ！」

しかも…………何か一夏の俺を見る目が何か妙だな  
の予感がしてならない…………。面倒事

「直哉、一つ聞かせててくれ…………どうして、そこまで強くなれたんだ……？」

聞かれると思つたけど、  
聞こへりこなあ……。  
いふ、せぐひかすか……。

俺のいた所じゃ命のやり取りなんて日常茶飯事でしたから

•  
•  
•  
•  
•

千冬さんはそれを聞いて黙り込んでしまった。  
まあ、殺しはしてないけどね俺は……。

さて、そんじゃ一夏に感想を聞きにいくかな  
と、その前に……。

「何か、ネズミでもいるんですかね?……わざわざからぬつてじゅう  
がないなあ……」

織斑先生は何の事が解らなかつたみたいだが、俺は模擬戦中に気配  
を感じていてある方向に向かつて叫ぶ。すると、何かの気配がして  
現れた。

「…………いつから判つてたのかしりへお姉さん、気配は完全に消し  
てたつもりなんだけど?」

現れたのは水色の髪に扇子を持つた女だつた。  
扇子には驚愕の文字が描かれている。

つか、某幸運男の背中じゃないんだからよ……

「織斑先生との模擬戦最中だよ……何か窺つよつた気配を感じたん  
でな」

「…………櫛無、お前か……」

「すみません、織斑先生……でも、先生が負けたのには驚きました

…………  
「…………  
どうやら織斑先生の知り合いみたいだな……。  
ま、俺にはあんま関係ないか……。

「如月、他人事みたいな顔してるがコイツはウチの生徒会長だぞ」

「…………あれま…………」

関係、大有りみたいだわ……

「フフ、よろしくね…………如月直哉君…………」

なあんか、妖艶に微笑まれてもなあ…………？  
面倒事の匂いしかブンブンしないわあ…………。

俺の平穏は何処へ？？

## episode - 4 模擬戦兼 入学試験開始！そして……（後書き）

次回は部屋割り～代表戦前まで書けたらいいかなあ～  
何て思つてます…………。

直哉は千冬相手にフラグが立ちました（笑）  
でもまだヒロインは未定です

episode - 5 — 夏と織斑先生からの頼まれ事（前書き）

御詫び

前回、代表戦前まで行こうかという事でしたが、今日は部屋割りまでです。

そして今回はいつも以上にグダグダ + 黙文です  
かなり批判的な意見もあるかもしませんが、そこは生暖かい気持ちでお願ひします m(—)

## episode - 5 — 夏と織斑先生からの頼まれ事

「はああああ……」

俺は一夏たちと別れ、1人で屋上に来ていた。フェンスに寄りかかりながらつい先程まで起きた出来事を頭の中で反芻し深あい、深あい溜め息を吐いた。

「面倒な事、引き受けちまつたなあ……」

そして面倒臭そうにぼやいた。

アレから、俺に何があったのか……それは模擬戦後まで時間は遡る。

「直哉つ！俺を鍛えてくれつ！……」

モニター室に戻ってきた俺に土下座をせんばかりの勢いで一夏が俺

に頭を下げる。

いや、何となく面倒なことが起きやつとせ思つたナビが

「…………つか、何で俺？」

「やつやお前の強さを見てたからに決まつてゐだろー」

…………ビーバーの格闘漫画じゃねえんだから…………

「つか、俺だつて一般の生徒だぞ？……他を当たつて……」

「お前ならオルコット如き、余裕で倒せるだつて……それに、私にも勝つたんだからそれぐらい出来る筈だろつて。」

横からしゃしゃり出ないでくれ…………織斑先生。

「それだつたら織斑先生が教えてやればいいんじやないすか？…………言ひつけや悪いけど教師は困つてゐる生徒を助けるのは常識でしょ？」

「スマンが、私も暇ではないのでな…………それに、教師として依怙顛覆する訳にもいかん」

これは織斑先生の弁。

「私も織斑先生と同じですね。」

これは山田先生の弁。

「えへ……お姉さんとしては協力してあげてもいいけど、私はその子よりも君に興味あるなあ…………

これは更識会長の弁。

つか、俺なんぞに興味つて大概変わってるなあ…………一部を除いて、正論なので何も言えんよ…………。

「…………俺だつて全てわかる訳じやない…………それに、お前の戦闘スタイルがわからん以上は手の出しそうがないしな…………」

ぶつむけやけ、面倒臭いといつのが其れなりの理由を占めているが、一応これも理由の一つだ。

下手に俺が手を出して妙な癖をつけてしまつたら田中も当たられんしな…………。

「まずはそいつを確かめてからだな…………ん？？」

「何か、一夏が意外そつな田で見てくるが俺、何か言つたか？」

「直哉、面倒臭いとか言いながら結構考へてるんだな…………」

「…………」のバカ、誰のせいだと思つてるんだか…………まあいい、一夏…………お前ガキの頃、何か武道か何かやつてなかつたか？」

確かに昔の記憶通りならコイシやつてた筈なんだけど…………？

「あ、ああ…………確かに剣道やつてたけど…………受験と生活もあつて中学3年間はずつと帰宅部だ！」

「威張つて言つくなよ…………なら基本ぐりこね出来てるだらうから強引に叩き込んだきやいが、問題があるな」

そう、一番重要な問題が……。

「問題とは何だ……？その口振りからして一夏を教える分には問題ないようだが……？」

織斑先生が俺に聞いてきた。確かに俺が教える分には問題ないがね……面倒臭いけど……。

「俺は剣道の事は全くといつていいほど無知だ。だから教えられない……」

ブレードになつてからはランサーを使うため、それに近い棒術は会得したけど、剣道の事に関しては無知だ……。

「…………そなのか…………」

一夏は氣を落としたように呟いた。

正直、罪悪感は沸くがこればっかりはどうじょもない……。

「…………あつー」

突然、一夏が何かを思い付いたように声を上げた。  
何かいい手でも見つけたかねえ？

「筹だよーあいつ剣道の全国大会優勝者だ！……ちょっと行つてく  
るーー！」

喜び勇んでモニタールームを出た一夏だが……

「……あのバカ、篠ノ乃の部屋の場所を知らないだろ？」

「我が弟ながらバカだと疲れたように咳いた織斑先生が妙に印象に残つた。

「で、でもつ！篠ノ乃さんに頼むと言つのはいい案だと思いますよ？」

「私はよく判りませんけど、剣道の事は剣道を知る人に聞くのが一番というのは確かにそうですね……」

山田先生と更識会長が感心したように言つ。

ま、何はともあれ俺はお役御免つてやつだな。

そのままモニタールームを出ようとすると……。

「まだ話は終わっていないぞ、如月……」

織斑先生に後ろから肩を掴まれた。

イダダダダダッ！－潰れる潰れるつ－－

「な、何すかっ！俺はもうお役御免でしょつ－？」

「まだお前には聞きたいことがある……あの工房の使用時間の事だ」

今、そこに触れるかあつ！？

そのまま帰りたかったのに……。でも部屋無いし……

「……答えてもいいんですけど……」

俺はチラシと更識会長と山田先生を見る。

織斑先生もそれに感付いた様だ。

「山田君、樋無……悪いがここからほ2人で話をさせてくれ

「え……で、でも……」

「私も彼に興味あるから聞きたいんですけど……」

「…………まあ別に聞いてもいいんですけど、間違いなく生きてる事を後悔しますよ?」

俺が2人に殺氣を向けると、顔面蒼白になり身体を震わせた。

「そ、そういうば私は仕事が残つてゐるんでした!」

「わ、私も生徒会の仕事が残つてゐるんだつた…………」

2人はそのまま退出した。まあほんの冗談だけね

「あまり2人を脅かすな……そんなに聞かれたくないのか?」

「まあそんなんでもないんですけどね…………さて、と

俺は織斑先生に向き直り、真剣な眼差しを向けた。

「これを聞くと、後戻りは出来ませんよ…………それでもいいですか?」

「…………わかった」

織斑先生も覚悟を決めたのか、神妙な顔でうなずいた。

「…………わかりました…………まずは俺の秘密から話しましょうか…………」

俺は織斑先生に自分の秘密を打ち明けた。

事故で死んで神にこの世界に転生したこと。

IIS自体、神にもらい生まれた頃から所持していることを…………。

まあこの世界がラノベといつのは省いたけどな…………

「…………」それが俺の秘密ですね…………」

「…………これで納得いった……お前が時折、私より歳上の感覚がしたのをな…………」

「まあ、実際年上でしたからね………… わあ、どうじますか？」

「…………決まつてゐるだろ？………… 私の胸の内に収めておくれ」

「…………いいんですか？…………自分で言つのも何ですか？…………こんな特異な俺をIIS学園に置いていいんですか？」

「私を甘く見るなよ？問題児の一人くらい抱え込むことくらい、造作もない！…………それに…………（どうも、コイツに…………如月直哉に惚れてしまつたみたいだからな／＼／＼）」

何か最後にいったみたいだけど突っ込まない方がいいみたいだな……

「まあ、置いてくれるならありがたいですよ……あ、そういうえば……俺の部屋ってどうなってるんですか?」

見た感じ、寮っぽいけど部屋がなきゃホテルでも構わないし?

「ああ、そういうふうは忘れてたな……一夏にも言つ忘れていた」

まあ、話を聞かずに勝手に出てつたからなあ……。あのバカは……。

「一夏の部屋は篠ノ乃と同じ部屋でお前は……//」

何故そこで顔を赤らめるし……何か妙な予感つ!?

「お、お前は私と同じ部屋だつ////変更は効かんぞ」

……何処でフラグ立てたつ!?

「…………了解です……」

俺は今度こそそのままモニタールームを出ようとしたが……。

「な、直哉……一夏の事なんだが……」

「アイツなら篠が剣道を教えるから問題ないでしょ?」

「…………篠ノ乃ではHSの事は教えられない……そこはお前が

教えてやつてくれ…………

「…………」

…………やれやれ、じょのアリコンめ…………

「わかりましたよ、その件に関しては引き受けます」

俺はそう答え、今度はモニタールームを出した。

そして畳頭に戻る。

「まあ、引き受けたからにはきつぱりやつてやるか…………かなりス  
バルタ式にだがな」

俺はそう決意して屋上を後にした。

取り敢えず、一夏に話を通しておおく…………わて、と…………

そんじや行くかな

俺はクラスメイトの一人を捕まえて簞の部屋を聞き、そのまま向か

つたが……

「…………としたの、これ……」

部屋に来てみると、部屋の前に一夏が正座しており頭にたん瘤が出  
来ていた。

何が起きたんだね?……

## episode - 5 — 夏と織斑先生からの頼まれ事（後書き）

セシリア戦まで終わったら一度、キャラ設定を作りうと思こまや

## episode - 6 1日終わつ（前書き）

連投です！

ヒロインはこの作品を見ている人がわかつてゐるよつにあの人になりました。

アンケートにお応えいただいた読者の皆様、申し訳ありません

「…………なるほど、一夏が勝手に部屋に入ってきたら、  
ワーカから戻ってきた簾と鉢合わせして竹刀でボコボコにした挙げ句、  
外に放り出して正座させたと……」

「ああ、やうだー！」

簾はつい先程の出来事を思い出したのか顔を真っ赤にしている。  
ちなみに一夏は俺達の前で正座中だ。

「まあ八割は一夏が悪いわなあ…………」

「…………ああ、すまなかつたな、簾」

「ま、まあわかればいい…………次からは気を付けてくれ

「さて、と…………次は簾だな…………」

「なつー!? わ、私は悪くないぞー！」

自覚症状無いってのも恐ろしいもんだな

「…………あのなあ、いくら一夏が悪いって言つても竹刀でぶつ叩く  
のはやつすぎだと思わないか?」

「う…………け、けど…………」

「ましてやぶつかったところが悪かったら身体に一生物の傷を残す

「……」

「……」

それを聞き、意氣消沈する筈。

これで判つてくれりやいいけどな?

「さ、解つたら筈は一夏に言わなきゃならぬことがあるだら?」

「……ああ、済まなかつたな、一夏」

「い、いや……俺もノックもしないで勝手に入つて悪かつたよ」

ま、取り敢えず解決だな。そういえば……。

「といひで、一夏は筈に剣道の事は伝えたのか?」

「あ、まだだつた!」

「?=?……何の話だ?」

「ああ、実はな……」

一夏はつい先程の事を筈に話した。

俺が織斑先生に勝つたと聞いたら口を大きく開けて驚いていたが……。

「……話はわかつた……つまりは一夏を代表戦までに出来る限り剣道で鍛えればいいんだな?」

「ああ、ISに関しては俺が教えるから篠は一夏に出来る限りでいいから教えてやつてくれ」

俺達が一夏の教育方針について話している傍でボケツとしてる一夏。

「一応、お前の事なんだから真面目に聞けよ……。

「それと、一夏…………言ふ忘れてたナビお前、篠と同室だからな」

「「へ（え）？」

いやあ、息があつていいねえ

「ち、ちよつと待て…………もう一度言つてくれないか、直哉？」

「まあ、一夏と同室なのが恥ずかしいのはわかるけど決定事項、らしこそ、  
いざ、篠」

「な、ななな…………／＼／＼

お～お～、顔真っ赤にしちゃつてえ……。

一夏を想つ氣持ちは変わらずつか?

「い、一夏はどう思つてるんだ……？わ、私と同室なのは？..」

「俺か……？確かに恥ずかしいけど、篠相手なら気が楽だな

「や、そつか……」

あんま2人の邪魔するのも気が引けるな、帰るか……。

「んじゃま、御二人さん……後の事は2人で決めてくれ、俺は帰るから」

「あ、ああ……そういえば直哉の部屋は何処になるんだ?」

「…………織斑先生と同室だよ…………」

「…………」「…………」

2人とも、そんな気の毒に的な視線はやめてくれ……虚しくなるから

「んじゃ、また明日な」

そのまま俺は2人の部屋を出た。

俺は織斑先生のいる寮長室に向かい、ノックした。

「ま、待つていたぞ……直哉」

出迎えてくれたのは織斑先生だったが、織斑先生の後ろから見えた部屋の状況が酷かった……。

いや、酷いなんてもんじやない！

まるで大災害でも起きたかのような惨状だ……。

片付けられない女もここまで行くと自然災害並みだな……。

「お、織斑先生……」

「…………昔みたいに千冬でいい…………」

いや、そんな哀しそうな顔で言わないでくれ…………何か罪悪感あるから…………

「わかったよ、千冬さん……それより部屋の掃除しようか…………これじゃ俺が寝れないからねー！」

「う…………す、すまん…………」

俺は制服の腕を捲りながら部屋掃除に取り掛かった。千冬さんも申し訳なさそうな顔をしつつも作業に取り掛かった。

数時間後、部屋は向とか片付き俺達は一段落吐いた。

「まさか、一日の最後に部屋の掃除をすることになるとは思わなかつたなあ……」

「…………重ね重ねスマン…………」

「別に気にしないでいいよ……千冬さんも変わってなくて良かった

」

「そ、そりが…………／＼／＼

…………やつぱぱどっかでフラグ立てたかなあ…………

「それで?何か部屋での決まり事はあるのかい?」

「ああ…………」

それから俺達は部屋での決まり事を話した。

にしても……千冬さんの家事能力に関しては変化無しか…………。  
将来、どうするんだかねえ…………。

「千冬さん、ビール貰つよ」

「お前、未成年だろ？」「

「今は俺の方が年上だよ」

「全く……一本だけだぞ？」

「ありがと」

俺は冷蔵庫からビールを一本取り出し、タブを開けそのまま飲んだ。

「ん~ やっぱ久々のビールは旨いねえ」「

「……私にもくれないか？」

「おつと……そうだった」

俺は冷蔵庫からもう一本取り出そうとしたが

「お、お前の飲み掛けのやつで構わん／＼／＼

「おいおい、それって間接キス狙つてない？  
まあ、いつかね？」

「はいよーその代わりもう一本もひつよ?」「

「む……仕方無いな……」

俺はそのままもう一本取り出してプルタブを開けて飲んだ。

「…………／＼／＼／＼

千冬さんは顔を真っ赤にして恍惚な表情をしながらビールを飲んでいた。

ある意味器用だなあなどと変なところでも感心してしまったが

「んじゃ、明日もあるからもつ寝るよ……俺、向こうの床使つか  
ら」

俺は千冬さんの答えを聞かずにそのまま布団を借りて横になつた。  
どうやら自分が思つていて以上に疲れていたようで睡魔は

直ぐに襲い掛かり俺は抵抗もせずに眠りについた。

その翌朝、俺に天国だか地獄だかよくわからない状況になつていてのを寝ている俺が知る由もない。

episode - 6 1日終わつ（後書き）

次回は時間を飛ばして代表戦に行こうかなと思ひます

## episode - 7 クラス代表戦開始！（前書き）

更に連続投稿です。

今回は一気にクラス代表戦前までキンクリします。

## episode・7 クラス代表戦開始！

「ん…………んん…………」

次の日の早朝…………いや、明け方の5時か…………。  
俺は目を覚ました。

時差ボケでまだ寝てるかと思つたが、どうやら寝ねなかつたらしく…………

「案外よく眠れるもんだなあ…………ん？？」

「スーツ…………スーツ…………」

…………何故千冬さんがいる…………ちょっと落ち着いて考えてみよつ…………。

確かに、昨日は千冬さんにビール貰つて飲んでからすぐ寝た。  
うん、落ち着いて考える必要なかつたな！

でも流石にちよつと焦つたぞ？

まあ不純異性交遊はしてないからその辺は安心できただけど…………。

「ちよおつと無防備過ぎじやないかなあ…………昔だったら理性イ力  
れて絶対に襲つてたぞ…………」

「…………ほお、聞き捨てならない台詞を聞いたな…………」

「…………何だ、起きてたんだ？」

「つこ先程な…………と云つて起きるのが早すぎだ」

「…………まあそれは人それぞれって事で……つか、何で人の布団に  
？」「

「そ、それは…………お、お前が余りにも寒そうにしてたからでな  
つ！」

「昨日は大部快適に寝れただけど…………？」

「う、うう…………／＼／＼

何このかわいい生き物…………目え潤ませて／＼見上げられると…………

「思わず抱いちゃいそうだ…………」

「だつー…………あうううつ…………／＼／＼

何か悶え始めたけど…………あれ？…………俺、何言つた？…………まあ  
いい、起きるとこようか

「俺、ちよつとトレーニングしてくるわ…………」

「いや、でも…………直哉なら私は…………／＼／＼

びつやら頭ショートしてイカれたようだ。  
ま、いつか…………。

俺はトレーニングウェアを持ってシャワー室に行き、着替えた。

「そんじゃ、行つてきますかね！」「

寮長室を出て、俺は学園外周をそのまま走った。

一頻り走つて思つたことは、この学園……無駄に広  
わざわざねつ！？と思つた。

そのまま走り込み、いい感じで身体が温まつた頃には口が射し上つ  
てきた。

取り敢えず、今日はここまでかな……。

そんな感じで代表戦まで過ぎていつた。

一夏の出来具合をここで軽く話していくつと思つ。

次の日の放課後に一夏と篠が試合をして一夏がボロ負けした。

どうも昔は篠よりも一夏の方が強かつたらしいが、今では経験の差  
が大きく開きすぎてしまい、そんな結果に篠が激怒し、より一層一  
夏への修練に力を入れたみたいだ。

まあ小声で一夏と2人きりで特訓出来て良かつたな、何て言つたら  
顔赤くしてたけど……。

IS関係に関してだが、一夏に専用機が届く様な事を千冬さんが言  
つていたな。一応、どんなISなのか聞くと機密事項と言われ聞け  
出せなかつた……。

それさえ判れば攻め様はあるんだけどなあ……。

一応、IS関連は知識の方は基本的なことはスバルタ式で叩き込ん

である。

俺自身もセイまで詳しく述べは解つてはいないが基本的な事は覚えている。

それだけ呑き込んでおけば平氣だわい。

後は代表戦まで篠が一夏を徹底的にじごくだけだ。

そんな風に日々は過ぎてこき、遂に代表戦当日がやつてきた。

やつてきたのだが……

「おこ一夏、篠……」

「何だよ、直哉……」

「まあ言いたいことはわかるけどな……」

「なら言わせてもらひうがな……専用機が当口まで来ないつてどうよ?」

ピットに待機していた俺達に届いたのは専用機がまだ来ていないとの知らせだった。

これに關しては一夏に非はない。

製作者の問題だ。

確か、IJS製作者の名前は篠ノ乃束、篠の姉だつたな。

昔から非常識だと思つてたがここまでとは……

「のままじや不戦勝かなあ……と思つたその時だつた。

「織斑君！織斑君！織斑君！」

山田先生が走つて近づいてきた。  
揺れる双児山に田が行つたのは内緒である。

「山田先生、どうしたんですか？」

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……と、届きましたー織斑君のEIS  
が！」

「「……」」

それを聞いて一夏と篠がそのまま走り出した。

「あつ！待つてくださいい！……」

それを慌てて追い掛ける山田先生。  
ああ、また双子山が……眼福眼福……。

「何て言つてる場合じゃないか！」

俺もそのまま3人の後を追つていった。

そして、俺が辿り着いた時に田にしたのは『白』一色の機体だった。  
何処ぞの連邦の白い悪魔か、と連想した俺は絶対悪くないはずだ！

「時間がない、早く乗れ。背中を預けるようにすればいい、ああそ  
うだ……後はシステムが何とかする」

織斑先生の指示により、そのまま機体が一夏に装着される。  
しかし、ホントに白いなあ……名前も『白式』みたいだし……。  
(この名前を聞いたとき、金色じゃないのかと思つて織斑先生に拳  
骨を喰らつたのは余談である……拳骨した織斑先生の方が人知  
れず痛がっていたが……)

おつーどひやら一夏の準備が完了したよつだ。

「第……」

「な、なんだ……？」

「行つてぐるー」

「あ、ああつー勝つてこーーー！」

そんな周りが見たら微笑ましいやり取りを第としていたら一夏は次  
に俺の方を向いた。

「直哉……」

「ん？ どうした、早いとこない」とホストのドリル女が待ちくたびれるぞ？』

「わかつてゐや…… ただ、これだけは言いたくてな

「……？ 何だよ？？

「こ」の決闘が終わつたら、俺と勝負してくれー」

「…………まあ、考へとくよ」

「よし……なら行つてくわー」

一夏はピジトを飛び出してそのままアリーナに向かつた。

これからクラス代表をかけた決闘が始まる。

果たして勝つのは、一夏か！？ それともセシリシアか！？

勝利の女神はどうぞ微笑むのか！？

それは誰にもわからない…… ただ、神のみぞ知るだけである。



episode - 7 クラス代表戦開始！（後書き）

次は織斑一夏▽Sセシリア・オルコットをお送りします

## episode - 8 対決！白VS蒼（前書き）

どもです！

今回は遂に、一夏とセシリアの対決になります。

相変わらず、戦闘描写は下手ですが……下手なりに頑張りたい……。

誰かあ……私に文才を……

## episode・8 対決！白VS蒼

「あら、遅かったですね…………てっきり逃げたのかと思いましたわ」

アリーナに飛び出した俺に待っていたのは蒼のT-Sを纏ったセシリアだつた。

それも皮肉を込めて……

「何で俺が逃げなきゃならないんだ？」

正直、楽しみで仕方ないんだけどな…………！

たつたの数十時間に籌や直哉にじこかれた俺が代表候補生相手に何処までやれるのか…………！

ただ、直哉の扱きだけは地獄だつたけど…………。

「決まつてますわ！私が勝つんですもの…………それに恐れをなして逃げることは恥じやないですわよ？」

「言つてくれるな…………俺だつてこの田まで遊んでいた訳じゃない！」

「そう、籌達に感謝してもしつりない…………！」

その成果を今、じじでぶつける……

「引く気はなくつて？」

「くびこぐやー来るなうれいわと来つよー」

「セリ、なり…………」

ビショーンツーバシイツ！

「ぐあつー。」

「お別れですわねつー。」

セシリ亞のI-Sの持つライフルで撃たれ、先手を取られた！

「さあつ踊りなさい…………！私、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲『ワルツ』で！！」

それと同時にセシリ亞の背部に装着されたビット兵器が射出され、俺に襲いかかってきた！

「くつ…………ー。」

彼方此方を飛んでくるビットに翻弄されて中々セシリ亞に近付けない！

（ナビ…………楽しいー。）

俺は自分の内側から溢れ出る高揚感を抑えきれなかった。

自らI-Sを操る実感…………

I-Sを使って空を飛ぶ感覚

そのどれもが新鮮で楽しいと言つ感覺があった。

SIDE 直哉

「織斑君、凄いですねえ……ISに乗るのが一回目とは思えないぐらいです……」

山田先生は素直に一夏の機動に感心するが……。

「あのバカ……」

対する織斑先生は苦々しい顔で一夏の様子を見ていた。

「…………やれやれ、あのおバカは……」

まあ俺も同じ感想だつたりもするけど……

「え? ? ? ど、どいつ事ですか?」

まあ山田先生は一夏とは付き合つてが浅いからわからないんだがつ……。

篇も心配そうに一夏を見ていた。

「ああ、状況が悪いのに浮かれてるからですよ、山田先生」

俺は山田先生に俺と織斑先生の呴きの理由を話した。

「如月の言つ通りだ……見てば解るが、あの片手を握つたり開いたりするだろ?」

織斑先生が一夏の手を指し示し、山田先生に教える。

「ええ、確かに握つたり開いたりしますけど……」

「あれはアイツの癖でな……大抵、あの癖が出ると……」

「アホみたいに単純なミスをしでかすんですよ……」

その後の織斑先生の言葉を俺が繋げる。

そう、ガキの頃にも何度も重要な場面での癖を出してしまい、誰でも出来る簡単な事をミスつてた事があった。  
それのお陰で俺がどんだけ尻拭いしてきたことか……

あ、何か思い出したら腹立つてきたな……。

後でO HANASHIさせてもらひつか……」

「へえ……流石は姉弟と昔からの知り合いなんですねえ……」

山田先生、変なこで感心しないでください……。

「一夏……」

試合を見ていた筈が心配そり一夏の名前を呴いた。

と、その時だつた。

一夏の動きに変化があつたのは……。

S H I D E 直哉 e n d

S H I D E 一夏

「セシリヤ…」

手にした近接ブレードで飛び回るビットの一つを破壊した！

「なつー？..」

「…セシリヤー！」

破壊されるとは思つていなかつたのか、驚愕の声をあげたセシリ亞を余所に俺はそのまま別のビットを破壊する。

ビットの射線上、ギリギリに避けつつ、さつビットを次々と破壊できた……

「さうか、わかつたぞ！…」

俺はそのままビットの攻撃を避けつつ、次のビットを攻撃する。

「コイツはお前の意志で動く！……つまり、コイツを動かしている間、お前は何も出来ないって訳だ！」

そして速度を上げて回避を繰り返し、再びビットを破壊する！

「だから、別の方向に意識を持つていけば！…」

その言葉通り、別方向からブレードでビットを破壊する！

「容易に破壊できるってわけだ！…」

「ぐう……！」

「じつやア、イツは図星を突かれて旗色が悪くなつたようだ！…これならつ！…」

「でりやあつ！…！」

残りのビットも破壊して、そのままアイツに突っ込むが……。

「かかりましたわねつ！…」

別の方から現れたビットが俺に掛けてミサイルを放つてくれる！…まだあつたのかつ！…

ミサイルは既に俺の目の前まで来ていて避けられない！

(くへ……！」までかつ……ん？何だ！？)

俺はハイパー・センサーの項目を見た瞬間、半ばやけになっていたのもあつてそのパネルを押した。

SIDE 直哉

「機体に救われたな、馬鹿め……」

「漫画みたいなタイミングだなあ……」

俺達2人は安堵したように呟いた……。

あのブルー・ティアーズ（織斑先生に教えてもらつた）のビットから放たれたミサイルが直撃し、終わつたかと思いきや、煙が消えそこに現れたのは先程の白式とは違い、より洗練された白式がそこにいたのだから……。

「い、一夏……？」

「……アレが白式の一次移行『ファーストシフト』ですか……」

俺は一夏の白式を見ると同時に互いのシールドエネルギーを見た……

……。

「…………ナビ、コレジヤ一夏は負けるかもな…………」

「なつー・ービ、ビツコツ事だ、直哉つー。」

俺の発言に篝が食いついてくる。

いやいや、篝さんや…………状況考えようぜ？

「理由としては第1に一次移行するまでにシールドエネルギーを減らされ過ぎた…………第2に相手のシールドエネルギーはそれほど減つてないから多少の無茶は聞くかもしれないこと…………第3、これが大半の理由だが白式の武装が近接ブレードしかない、よつて一次移行しても武器が変わらない、若しくはパワーアップしてシールドエネルギーを使用するかもしれない…………以上の理由だ」

取り敢えず挙げられる理由を述べた。

まああくまで可能性だがね…………。

「ほら、試合が動き出したぞ？」

「つー。」

俺がそつまつと、篝は直ぐにそちらにかぶり付いた。

『勝者、セシリア・オルコット』

あ、一夏のやつ負けたな…………篝もガックリ氣を落としてるし。  
まあ、一夏のどこにでも行つてやるかね…………。

既に織斑先生や山田先生は先に行つてゐみたいだし……

更衣室に行くと、一夏がどうやらの某明日のヨーの様に真っ白に燃え尽きてうなだれていた。

「よ、一夏！」

「…………ね！」

「ん～、負けたことに関して相当凹んでるみたいだなあ……。

「まあ、いい線までいつてたんじゃないかな？……途中で浮かれてたのは負けないけどな？」

「うぐ……」

まあ浮かれてたと、直覚はあったみたいだし、次からはもう直感は無くなるだろ。

コイツは昔から叩けば叩くほど強くなつていつてるからな……それに、白式の戦闘タイプもわかつたし。一夏が特訓したいつてなら面倒臭いが、俺も協力してやるかね。

あ、そうだ……気になることがあつたな。

「やういえば、一夏……敗因は結局何だつたんだ？」

「…………俺が使った雪片だよ…………アレにバリア無効化能力があつたみたいで…………」

「ふうん、そんだけ凄まじい威力ならデメリットも大きそうだな…………」

どうやら事実の様で、あの雪片は威力が多大な分、自らのシールドエネルギーを多大に消費させてしまうらしい…………。と織斑先生は言つていた

「ま、それに關しても要練習だな…………一種の切り札なんだ、普段からバカスカ使うわけにもいかないし、使い処をきちんと見極めな？…………さて、と…………」

俺はコキコキ、と身体を解しながら準備を始める。  
ちなみに俺はISスーツは着ないからな？  
あんなピッチリしたモツコリスーツなんて…………！

「直哉…………負けんなよ？」

「誰に向かつて言つてるんだ？…………あんなドリル女、軽く遊んでやるよ！…………」

俺達は互いに手を打ち合わせた。

さて、次は俺の番だ…………面倒臭いけど、行きますかね！

そのまま俺達は織斑先生達が待つピットに向かつた…………。  
(余談だが、一夏は勿論ISスーツから制服にちゃんと着替えてた

からな？

流石にISスースで観戦とかないわあ…………。それを直哉が指摘し  
たら慌てて着替えたといつ…………）

episode - 8 対決!白VS蒼（後書き）

次回は直哉VSセシリアをお送りします。

別物でこの作品の記念企画として何か書いつかなあ…… 何でおバカな事を考えています（笑）

## episode・9 宇宙の騎士▽S蒼の滴（前書き）

今回も酷い駄文の完成です…………。

多分、今まで書いていたものより酷いと思います…………。

前回は一夏▽Sセシリアでしたが、今回は直哉▽Sセシリアとなります。

原作を知らないから色々と突っ込み所が満載ですが、生暖かい気持ちで見守ってあげてください…………。

それと、こんな自分のダメ作品がお気に入り件数90件&突破しました…………！

これに関しては嬉しい限りです（^ - ^）／

見てくださってる読者の皆様、本当にありがとうございます！

## episode・9 宇宙の騎士VS蒼の滴

俺達が着いた頃には既に、織斑先生、山田先生、幕がピットで待っていた。

「さて、次は如月の番だが……本氣で行くつもりか?」

「いやいや、あんなので本氣出したら……ねえ……?」

俺と直に戦った織斑先生、観戦していた一夏、山田先生は首を縊に頷いていた。幕に関しては見ていなかつたためか、頭にクエスチョンマークを浮かべていたが……。

「……一夏、直哉が織斑先生に勝つたといつのは本当なのか?」

事の真意を一夏に尋ねていた。

まあ、世界最強と言われた織斑先生がたかが1-5のガキに負けたといつのが信じられないのだろう……。

「ああ、圧倒的な差で勝つてたよ……それに直哉はまだ本氣じやなかつたみたいだ……」

いやいや、流石に本氣出して戦つてたら世界滅ぶから! テックマンの性能をフルに出すつもりはないから!

まさかISがアソコまで脆いとは思わなかつたし……

「でも、暮桜を使ってたらいい勝負でも出来たんじゃないかな……同じISでもアレだけは性能も違うだろ?」

一応、織斑先生のフォローはしておくとしよう。

流石に本気は出せないけど、ISまで性能落としたらいい勝負になるのは事実だし。

「…………まあ、やうこい」としておひづり。それで、如月は準備出来たのか?」

「はい…………と、その前に…………」

俺は腕に着けてるブレスレットを外し、そのまま掲げた。

「ペガス、起きてくれ」

俺が一声かけるとブレスレットは光を放ち、そのままロボットになつた。

「…………なつ…………?」「…………」

皆さん、大混乱(笑)

まあ誰にも見せたことなかつたしな…………。

「俺のサポートISのペガスだ…………ペガス、自己紹介しろ」

『はい…………マスターのサポートを務めますペガスと申します…………

皆さん、お見知り置きを…………』

ペガスが頭を下げて自己紹介した。

ホント、ISに人工知能を組み込んだだけなのにどつか人間臭くなつたなあ…………

「あ、いや……」「、」

そんなペガスに驚き、一夏達人間勢は釣られて頭を下げた。

何だ、このシユールな光景（笑）

「まあ俺のデータやら話しあ相手に聞してはコイツに一任してるから観戦中はそつちに頼むわ……」

俺は一夏達に言い含み、胸元のペンダントに付いたテック・クリスタルを外して上に掲げ、叫んだ。

「テエエックッ！セツタアアアアアツーーー！」

瞬間、俺の体は輝きを纏い次々と装甲が纏われていき光が止んだ頃には全身装甲に覆われた俺がいた……。

「テツカマンツー！ブレーードッ！ー！」

肩のファンからランサーを排出し、それを連結させてピットからアリーナへ飛び出した。

「フ、全身<sup>フルスキン</sup>装甲タイプのHS……」

「相変わらず凄いよなあ、直哉のHSは……」

「全くですねえ……それに相対するオルコットさんが少し哀れに思  
います……」

「…………ペガスと言つたな、よろしく頼むぞ」

『此方』をよろしくお願ひいたします…………奥方様』

このペガスの発言を聞き、ピット内の時間が止まった（笑）  
ちなみに上から第、一夏、山田先生、織斑先生、ペガスである。

「お、奥方つて…………織斑先生がですか？」

「織斑先生…………直哉と付き合つていたんですかっ！？」

「あ、あう…………いや、これはだな…………」

「千冬姉…………」

「い、一夏もそんな微笑ましい目で私を見るなあっ！！」

等と再び力オスになつていたのをアリーナに向かつていた俺が知る  
由もなかつた（笑）

興奮冷めやまぬアリーナでは観戦していた生徒達が再び熱狂していた。

「えつー？あれって…………如月くんつー？」

「（全身装甲型）フルスキンタイプ…………スゴい…………」

「織斑君に続いて如月くんかあ…………どんな戦いになるんだろ？？」

等々、様々な発言が飛び交う中相対するセシリアは…………。

「…………」

至つて落ち着いていた。

先程の一夏戦で思つところがあつたのか、冷静に俺を観察していた。

「…………やつした、俺を罵倒するんじゃなかつたのか？」

「…………試合を始める前に貴方にお詫びしますわ…………」

「以前までの傲慢さが成りを潜めてる……。  
一夏との戦いでどうやら変わったみたいだな……。

「以前、貴殿方お一人を罵倒したこと……誠に申し訳ありませんでした……」

そう言って頭を下げるセシリ亞。

おやま、一夏のやつ……落としたな、コイツを……

「…………わかつた、謝罪を受け取るつ……此方からも一つ聞きた  
いんだが……」

「はい?なんですか?」

「アイツの…………一夏の何処に惚れたんだ?」

「つーーーーー?そ、それは…………」

「…………まあ、今はいいかな……一応、真剣勝負ガチシムで対決だからな  
…………」

「つーーーー?そ、うですわね、では……先制は私がいただきますわ  
つーーーー!」

バシュウウツ!

セシリ亞は手にしたライフルを俺に放つが……。

「…………」

シユンツー！

俺は軽々と迫つて来たビームを避ける。

「……………じつした？狙ひなひりやんと狙えよ？」

「……………ぐつー！」

バシユウツー・バシユウツー・バシユウツー・

シユンツー・シユンツー・シユンツー・

セシリ亞が撃ち、俺が軽々と避ける攻防が続く。

「ならひーー！これは如何ですかーー？」

焦れたセシリ亞が背部のジッパーをじりりに放つてきた。  
だが、俺にはその機動が遅く感じてしまい…………

「ぬうんつー！」

バシイツー！

ランサーを振るい、ビットを徐々に破壊していった。

「なつーー？」

「一夏戦で俺に手の内を見せすぎたな……………今度は俺から行こうか

！」

S H D E 千冬

「アイツめ……遊んでいるな……」

『その様ですな……マスターの悪い癖です……』

私の言葉にペガスが相槌を打つ。  
ピットでのあの騒ぎの後、事の原因であるペガスが治めて事なきを得たが……改めて見ると、どうにも人間臭く感じてしまつた。

『それで、奥方様……』

「奥方様と言つのは止めてくれないか、まだ結婚すらしていないぞ」

『ふむ……まだ、と云つことは何れは結婚すると云つことですね?』

「なつー?何を……」

『おや、違うのですかな？……つまり私はそういう仲だと……』

そ、それは……確かに直哉とはそういう仲になりたいが……つ……い、一夏達がいなくて良かつた……！

私のこんな醜態を晒すわけにはいかんからな……

「お、お前はアイツのサポートと言つていたが……」

『ふむ……本来なら私はエリで言つところのパッケージに辺り、戦闘のサポートを致しますが……代表候補生如きで私を使うことは決してないでしょ……』

……これを聞いた私が思つたことは一つだ……！ペガスを使用した時の直哉はどれだけ強くなるのか？……私でも勝てないと言うのに……。

『ふむ……そろそろ試合が動く頃ですな……』

ペガスのその発言に私はモニターを直視していた……！

SHDE 千冬 end

SIDE 直哉

さて、遊ぶだけ遊んだし……そろそろ行きますか！

「それじゃ、行くぞ？……見逃したらあつといつ間だぞ」

直ぐ様、俺は高速機動を開始した。

「なつ！？き、消えたつ！？」

「遅いっ！」

ガキイツ！

「あうつ！？」

俺はセシリ亞の背後に回り、ランサーで斬りつけた。これでも3割近くで戦ってるんだがなあ？

「ぐうつ！そこですわっ！」

セシリ亞はすぐさま振り向いて近接戦用の装備に切り替えるが、残念……！

「俺は！」ひだり！

再び移動して、ランサーで斬りつける。  
この動作を繰り返している内にセシリアの装甲にヒビが入り、ボロボロになつていつた。

「どうだ？ 降参するか？」

俺は息も絶え絶えのセシリアにそう持ちかけるが……

「ハアッ……ハアッ……ハアッ……ま、まだやれますわ！」

全く、強がつちゃつてまあ……。  
だが、その根性は氣に入つたぜ？

「なら、その根性に免じて俺の技の一つを見せてやるよ。」

俺はそこから飛び上がり、装甲を変形させ、セシリアに突つ込んだ。

「クラッショウ！ イントルード……」

先程とは比べ物にならないスピードでセシリアに突つ込み、ぶつかった。

「ぐつーきやあつーあうつー！」

そのまま縦横無尽に駆け回り、上空から勢いを付けて突撃した。

「…………ふう、中々加減が難しいな…………」

本来、クラッショウイントルードは多数の敵を相手に使用する技だが、

ついつい使つてしまつた。

そして、そこにいるのはEVAが解除され氣絶しているセシリアが横たわつていた。

「勝者　　如月直哉　　」

そんなアナウンスと共にアリーナに歓声が響いた。

……女子ばつかだから声が高いので、一種の超音波みたいだなあ

……

「…………」

セシリアを抱き上げ、俺は早々にペニスに引き上げた。

そこに鬼が待つているのを知らずに

……

episode - 9 宇宙の騎士∨S蒼の滴（後書き）

お気に入り件数100件越したら何か記念物で書いつと思いつます。

軽くネタバレするなら、昔にジャンプでやっていた某M張のネタを

.....

## episode -10 試合後……そして……（前書き）

お気に入り件数、100件突破！

こんなダメ作品にお気に入り登録していただいてありがとうございますm(—)m

これからも極力頑張りますのでよろしくお願いします！！

さて、今回の終盤から急展開つ！？な場面になります

……贊否両論が激しそうですが、完全な血口満小說なので生暖かく見守ってやってください……。

SHADEセシリア

「ん…………んん…………」は…………？」

「おっ！ 気が付いたか？」

「あ、貴方はつ…………」

私が目を覚ますと田の前には最初に戦った織斑一夏さんでした……

「おお…………！」医務室だぞ…………『死絶する前の事、覚えてるか？』

「えつ…………やつこえば、私…………」

あの如月さんの一撃を貰つて…………

「…………負けてしましましたのね…………」

「まあ、あの直哉を相手にすればなあ…………」

一夏さんは無理もないと言いたげな表情で私の肩に手を置きました。  
ですが、次こそは…………」

「ちなみに、直哉のやつは3割程度しか力を発揮していないそうだ  
ぞ…………」

決意を固めた私に篠ノ乃さんの迫り討ちをかけた言葉が私の決意を崩壊させました……。」

「……で、でも一本氣の直哉といつかは戦つてみたいなー。」

「ん、そうですねー！」

一夏さんのフォローで私の決意は復活して固まりました！  
いつかは本氣の如月さんと戦つてみたいですね……でも、今の私には知りませんでした……。

如月さんの本氣と闘うには私達では天と地の差、日本の諺の一つである「月とスッポン」であるという事を……。

「ん、せつこうえーば……その如月さんは……？」

一夏さん達と一緒にいたと思われる如月さんの姿が見えません……。

「……」

「……」

一夏さんと篠ノ乃さんが微妙な顔で見合つてます。  
見るなら私にしてほしいですわー！

「あー……今、直哉は……」

SIDE 直哉

ただ今絶賛地獄巡り中です。

あの後、セシリアを抱き上げてピットに戻つた。

「や、やったな！直哉……」

「…………ま、まさか彼処まで圧倒的に強いとは…………」

「す、すこいですねえ…………き、如月君…………」

冷や汗をダラダラ流してゐ一夏と篠、山田先生と

「…………#」

妙な負のオーラを纏つて俺を素敵な笑顔で見ている鬼の帝王が降臨しております。

「…………あ、あ～…………一夏？セシリアを医務室に運んでくれるか？」

「あ、ああー！わかったつーー！」

「ま、待て、一夏ー！私も行くぞー！」

セシリ亞を受け取った一夏はそのまま脱兎の如く駆け出し、ピットを出ていき、簞も一夏の後を追つていった……。

……逃げたな、あいつら……！

「じ、じゃあつーわ、私も残りの仕事がありますからつーー！」

「あつーちよつや、山田先生つーー？」

「うむ、では頼んだぞ……私は如月に大事な大事なO'HANAS H-Eがあるのでなー！」

何故大事を2回言つたつー？それにお話の意味が違う意味に聞こえるんだけどつー！？

「あ、あははは……じ、じゃあ如月君……頑張つてね……」

「何を頑張れとつー？ああつー行かないで山田先生つーー？」

ガシッ！……ミシミシミシッ……

「いだだだだつーーか、肩が砕けるつーー！」

「ほら、お前はこつちだ……今から私と愉しい（主に私が）O'HANASHIの時間だぞ？」

「そんな田の笑つてない状態で言つても楽しくないから…？」

「いいから」いつに来い？…逃げたら……判るよな？」

……そんな田が単色の状態で言われたら逃げようにも逃げられない…！

「……………わかりました…………付いて逝きます…………」

泣く泣く俺は千冬さんに付き従うこととした…………。

だってあんな田で脅されたら後で何をされるかわからないから…………。

それから俺達は無人のアリーナにいた。

あれだけ騒がしく思つたアリーナも無人になると物静かなもんだなあ…………。

「…………それで？ここまで連れてこられたけど、俺に一体何の用が

あるんだ?」

「…………」

俺は千冬さんに尋ねたが、千冬さんは自身も何故か無言だった。

「…………流石に俺も疲れて眠いんだけど…………っ！」

帰ろうとする俺に千冬さんが突如、襲い掛かってきた！  
何とか反応でかいで、千冬さんから距離を取つたが……

「…………どうこいつもりだい？…………いきなり襲いかかつてくるな  
んて……」

「…………本気で闘え、直哉…………」

感情の籠らない表情で千冬さんは言い放つた。

「何だ、どうも様子が変だぞ…………。」

「…………お前と本気で闘い、お前は私のモノになるー…………その為  
には直哉、本気で闘えつ！ーーー！」

「ち、こ、っ！…………一体どうなつてゐるー？それに…………っ！？」

俺は千冬さんの攻勢を何とか捌きつつ、千冬さんの手にしたモノに  
目を凝つた。

「や、それはつ…………エビルのテッククリスタルつ！？…………何で千冬  
さんが！？…………」

「「Jの力があればっ……テック……セッタアアアアアツ……」

瞬間、クリスタルが紅く輝き、千冬さんの身体を包む。そして、光が止んでそこに現れたのは……！

「これが……テックマン・エビルの力か……！」

ブレードと対を成す外見を持ち、ブレードよりも刺々しく攻撃的な印象を持つテックマン・エビルの姿だった……！

「…………何で…………何で千冬さんがエビルにっ……ハツ……？」

「ハアアアアツ……！」

ガキインツ……！」

「ガハアツ……！」

俺はエビルと化した千冬さんに蹴られ、壁まで吹っ飛ばされた……！

「ぐうつ…………つう…………や、流石にテックマン状態の攻撃は生身じやキツいな…………」

「どうしたあつ……早くテックセツトして闘えつ……！」

何でこうなったんだ……ぐうつ……今の攻撃で右の五番と二番の肋を持つてかれたか……！

『…………やはり、こうなったか…………』

すると、突然頭の中に声が響いてきた……！  
「この声は……！」

「神か！一體何の事だつ！？」

俺をこの世界に転生させ、テックマンの力をくれたイケメン神の声  
だつた。

『彼女自身、力を欲していたみたいでね……だから少し後押ししてペガス経由で彼女にテッククリスタルを渡したんだが……エビルにはちよつとばかり厄介な効能があつてね……欲望が強ければ強いほど、その人の精神に深く侵食し、操つてしまふんだだから今の状態に陥つてるんだよ……』

「それでかよ……！何でああなつたつ！？」

『…………原因は、君だよ……如月直哉…………』

「つ……お、俺つ……？」

「どういづ事だ……つまつ……？」

「何時までもボヤボヤするなあつ……！」

千冬さんが待ち焦がれた様に攻撃を繰り出す！

地面が陥没してやがる……。

あんなもん、喰らったら流石に死ぬな……！

「ちいっ…………俺が原因つてどうこう事だ！？お前、何を知つて

るつ！」

『…………君は、織斑千冬が君に好意を持つていてる事に気付いてるね?』

「…………ああっーービーら辺でフラグ立てたか知らないがなっーー！」

千冬さんの攻撃を避けながら神の言葉を返す。

『…………本当にやうかな？…………』  
…………思ひ出しちゃうんだ……

「幼い頃  
……………  
がつ！？」

俺が動きを止めたのが不味く、千冬さんからいいのを貰ってしまい、観客席まで吹っ飛ばされ、意識を失つた…………。

## episode - 10 試合後……そして……（後書き）

前回の後書きに書いた通り、記念小説を書いつと思こますー！

少し話が進み次第、掲載するつもりです。

ただ、一つ注意事項が……キャラ崩壊必至です！！！

連投です！

千冬がエビルになりました。

この案はしにがみくませんからいたいたものです。

ありがとうございます m(—)m

では、また突つ込み処満載ですが、生暖かく見守ってやってください

「直哉つ！労負（ごづ）つ！！！」

…………あれ、

……また懲りずに来たの、千鶴さん？」

千冬さん? 何で高校の制服を

「おお、一真様ははじめておられるが、

ああ、そうか……これが幼い頃の記憶なのか……？ だけど、俺が原因って一体何の事なんだ……？

「ああ、はいはい……また捻つてあげるからかかるべきなよ。」

にしても、口愛いにの全くないが、ギたなあ  
ホントに俺かよ……

卷之三

同上

『酷いなあ、今この夢を見せてるのは僕なのに……』

そりや ありがたいと 言つかなんと 言つか

『素直に感謝すればいいのに……以前から織斑千冬が君に勝負を

挑んでいたみたいだね？……けど、勝負は毎回君の勝ちで終わつた……ほら、闘いが終わつたみたいだよ？』

『展開早いな、おい……まあいい……』

『くそつ！何故だ！？何故勝てないんだつ！？』

『氣づけば千冬さんが息を荒げ、膝を付いてガキの頃の俺を見上げていた。うわあ、ガキの頃の俺って性格悪かつたんだなあ……』

『いや、今も悪いからね』

『……後でやるが、お前？』

『…………千冬さん、もし俺に勝てたら千冬さんのお願い、一つ叶えてあげるよ～』

『くつ！…………お前、その言葉忘れるなよ？』

『そのまま千冬さんは立ち上がりつて帰つていつた…………ひょっとして、原因つてコレか？』

『漸く氣づいたよつだね…………』

『でも、只のガキの戯言だろ？』

『高校生の千冬さんがそんな事鵜呑みにするわけがないだろー？』

『まあ初めはそうだつたけどね…………あ、場面が変わると』

神に言われて田を向けると、確かに場面は変わっていた。

あれは……俺と一夏の小学校での卒業式？

「おじおじ、泣くなよ一夏？」

「け、ナゾよ……」

「そうだつた、俺が卒業と同時に世界に旅に出るつて言つたときだ……。

「それに、ダチは俺だけじゃないだろ？ 弾とか一馬、あの猫娘もいるだろ？」

「そつと言えば弾とか一馬、後は猫娘がいたなあ……

『鈴を猫娘つて……実際僕の好きなキャラなのに……』

まあお前の好きな子は今はビリビリにこし……ん？？ 何だ、あの土煙……？

「なああああおおおおやああああつ……」

土煙……？

おおつ！？ な、何かお子様が間違いなくトライマニアになつたやつな顔で何か來たぞつ！？

『いや、あれ織斑千冬だから……』

なにいつ！？ あ、確かに言われてみたら……

「あ、お前……旅に出るつてホントか？一。」

「あ、一夏から聞いたの？……まあ、ホントだけど……（中の人的に考えて今更、中学とか無いからなあ……）」

確かにこんな事考えてたなあ……根性ヒン曲がつたガキだ事。

『だから今もヒン曲がつてるからね？』

…………やつぱり今やね、お前……。

『あつーやめてやめて！……あつー』

何だよ、どうかしたか？……元々だけど……。

『僕の扱いひどくない！？展開が動いたんだよ！一。』

ほつ？

「直哉、あの約束はどうなったんだつー？」

「あの約束……？」

「お前に勝つたら、その……あれだ……」

「…………アレって何の事かな？……よくわからんだけだい？」

あの「ヤケ面」に一発ぶつけもうかな……

『いや、アレ君だから……今もどうなのは変わらないけど……』

「……私が勝てば願いを一つ叶えると言つ約束だ……反故にするのは許さんぞつ……？」

「……わつ言えば、そんな約束してたね……」

「わ、あのガキ最悪だ……」

『だから……もうこいや、突つ込むのも疲れたよ……』

「……なら、じよづか?……俺が日本に戻ってきたらまた勝負の続きをすることで……」

「……本当だな、また戻ってきたら勝負するんだなつ……？」

「うそ、また戻つたらね……！」

「……わかつた、ならその時にまた勝負だ……」

そつ言つて千冬さんは一夏を連れて家に帰り、俺も旅支度を整えて日本を出たんだよな……。

『それからも、織斑千冬は君との約束の為に修練を積んでたみたいだよ……』

そつか……これで原因が俺だと言つのも納得いつたよ……。

けど、そこからフラグを立てたかに繋がると考えると疑問が残るぞ?

『ああ、それは I.S 学園で一度日に君と戦った時だよ……アレから君がどれだけ強くなつたか、I.S を使って試したろ？……それから君が更に強くなつて、イケメンになつてたと言うのもあつたから君に一目惚れしたつてわけだ』

……俺つてイケメンだつたの？

『気にするのそっちなんだつ！？……まあでも、これでわかつたら君が原因だつて事が……』

……どうしたらいいかねえ、こいつた場合……？

『エビルを制するのに必要な強靭な精神力……これがあれば大丈夫なんだけど、今の彼女は不安定だ……彼女に呼び掛けつつ、全力で彼女と戦うしかないね』

……なら力貸せよ？ テッカマン同士が全力で戦つたら I.S 学園どいつもか日本が無事じや済まんぞ？

『……仕方無いかな、アリー・ナ全体に結界を張るけど、なるべく早めにケリをつけてくれよ？……本来なら僕が世界に干渉するのは禁忌なんだから……』

……わかつた

『それじゃ、君の意識を戻そう……頑張つてね？』

……言われるまでもないわ……！

『それじゃあ…………』

ガコッ

つてまたこのオチかよおおおおつー！？

再び俺はイケメン神の作った穴に落とされた…………。

「ん…………むわ…………」

意識が徐々に浮上し、俺は辺りを見回した。

「どうか、俺は…………」

「直哉つーこの程度で終わりではないだらつー！？早く起き上がりつてこいつー！」

千冬さん、いやヒゲルがアリーナの中心で腕組みしながら立つていた……。

散々、待たせちまつたみたいだな…………。

これはその罰と受け取つておくか…………！

「今なら全力出してでも問題ないって言つてたし…………いくぜっ！－！」

俺は胸元のテッククリスタルを外し、上に掲げ、あの言葉を叫んだ。

「テックッ！－セッタアアアアアアッ！－！」

テッククリスタルが翠色に輝き、俺の身体を覆い包む。

そして光が止み、中からは赤と白の装甲に身を包んだ騎士「オレ」が姿を表す。

「テックマンッ！－ブレーードッ！－！」

「…………さうだっ！－それでいいっ！－…………ハアアアアッ！－！」

エビルはランサーを排出し、そのまま俺に向かってきた。

「…………千冬さん、俺の本気…………今、貴女に見せるッ！－！」

俺も肩のファンからランサーを排出し、連結させてエビルに向かっていった。

今、I Sを超越した宇宙の騎士同士の対決が幕を開けた！！！  
果たして、直哉は千冬を正気に戻せるのかつ！？

感想、お待ちしております。……作者は精神的に脆いのでキツツイのは勘弁してください

## episode - 12 終結……（前書き）

今回で「ブレード・バービルは決着です

一応、この話で第一部は終了となります。

次は幕間を数話と設定を書きます。

ガギインツ！！

「ハアアアアアアツ！！！」

ガギインツ！！

アリーナ上空で2人の宇宙の騎士がぶつかり合う。  
1人は赤と白の鎧を身に纏つたテッカマンブレード＝如月直哉。  
もう1人は紅のテッククリスタルに洗脳され、操られし黒紅の騎士、  
テッカマンエビル＝織斑千冬である。

「ぐうう……千鶴さん、一目を覚ましてくれ。」

ランサー回士でのつばぜり合いでエビルを説得するブレードだが……。

「アアアアアアアアアッ！－！」

聞く耳を持たないエビルはそのままブレードを押し切ろうと力を込める。

ドガアツ！

「ぐつー！」

肋を折られているブレードは痛みのせいか、エビルに押し切られかけたが腹部に蹴りを叩き込み難を逃れ、距離を取った。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……（ぐつ……ヤバイな、エビルの力が想像以上だ……！長期戦に持ち込まれたら此方が不利だ……）」

ブレードは現状の不利を悟っていた。

幾ら全力を出せるからと言つても加減を間違えばエビルを殺してしまつ。

かといって長引かせれば今の手負いの自分では逆にやられてしまう。

ブレードの置かれた状況は正にハ方塞がりだった。

「一か八か……やつてやるつー！」

ブレードの肩部アーマーのビーム砲を展開させ、そこからブレードのエネルギーを充填させる。

「（チャージし過ぎると逆にエビルを殺しかねん……！加減しないと……）」

だが、ここでブレードは最大のミスを犯してしまう。エビルにはある機能があり、それをブレードが失念していた事を

。

「…………多少は我慢してくれよ…………！ボルテッカアアアツ！」

光の奔流となつたエネルギーがエビルに向かつて放たれた…………。  
だが、エビルは微動だにしなかつた。

「ハアアアアアアアツ……」

「なつ……？」

何と、エビルはブレードの放つたボルテッカを吸収してしまつたのだ！

「…………ちいっ……完全に忘れてたぜ、エビルはボルテッカのエネルギーを吸収しちまうんだつた！！」

自らの失策を悟つたブレードは直ぐにその場を離れようとするが……。

「アアアアアアアツ……！」

エビルはブレードのボルテッカのエネルギーをコントロールし、自らのボルテッカと共にブレードに向けて撃ち返した。

「ぐつ…………間に合わな…………ぐああああつ…………」

エビルのPSYボルテッカがブレードに直撃し、アリーナに大きなクレーターを残した。

「ハアツ…………ハアツ…………ハアツ…………この程度か…………直哉ああああ

あああつ！――！

エビルが息を荒げ、大きく咆哮したところでクレーターの中心部から何かが姿を現す。

「ハアツ　ハアツ　ハアツ　うぐつ！」

そこにいたのはPSYボルテッカをとともに喰らつた筈のブレードだつた。

あの時、ブレードは左腕に装備された小型シールドと、クラッシュインターロードを使用し、その纏うオーラでダメージを軽減していた。

「ぐううつ　！ガハアツ　！――！」

だがそれでもPSYボルテッカのダメージは大きく、アーマーはボロボロになり、ランサーを杖代わりにして立っているのがやつとだつた。

「　　ハハ　　アハハツ　　アツハツハツハツハツ！　　そ  
うだ、そうでなければ面白くないつ！――」

「ガアツ！――」

エビルは狂喜の笑みを浮かべ、そのままブレードの首を掴み、持ち上げた。

「どうしたあつ――お前はその程度の人間だつたのかあ！？」

「ぐつ　　う、嬉しい、か　　？」

「何……？」

エビルに締め上げられた状態でブレードが声を絶え絶えに呟く。

「あ、操、られ、た……状態、で……お、俺にか、勝つて……そ、そん、な、に……う、嬉しい、のか……？」

「ぐううう……だまれえつ……」

エビルはブレードの発言に不快感を露にし、更に首を締め上げる。

「ぐうううつ……む、むか、しの……あ、あんたなら、こ、こん、な……」、「とで……か、勝つても……ぜ、絶、対に……う、嬉し、く無い……」、「言ひ、ぜ……？」

「だ、黙れ黙れ黙れ黙れええええつ……」

「だ、だか、ら……お、俺、が……あ、あん、たを……し、正、気……」、「も、戾、す……」

「あ、ああ……ああああああああつ……」

エビルはブレードを放り投げ、頭を抱え、絶叫する。

「がつ……か、必ず……あ、あんたを正氣に戻してやるつ……」、「起きるつ……ペガスツ……」

ブレードの腕に装着されたブレスレットが輝き、そこからブレードより一回り大きい口ボットが姿を現す。

『マスター、レーピードへやられましたな』

「ま、まあな……これも含めてあのを放置してた罰と受け止め  
るさ……それより、力を貸してくれ……エビルを……千冬さんを助けるつ……」

ブレードの目に力が宿り、エビルを見据える。

エビルは胸のビーム砲にエネルギーを充填させてボルテッカを放つ態勢に入った。

畏まりました！奥方様を助けるために……………！』

ペガスはブレードの言葉を聞き、巡航形態になる。

「……チャンスは、一度きりだ……それ以上は俺が持たない……！」

『ラーサ！……エネルギーチャージ開始！』

ペガスに搭乗し、ペガスに装備されているエネルギーバイパスの役割を果たすグリップを握り締め、肩部アーマーのビーム砲を展開する。

『もう…………！願いなどどうでもいいっ！！私のモノにならないのならば、死ねえっ！！死んでから私のモノにしてやるうううううう！……』

錯乱し、支離滅裂な事を言つてゐるエビルからボルテッカが発射された。

『エネルギー・チャージ完了！…………マスター！！』

「この一撃にかけるっ！…………ハイコートオツ！ボルテッカアアアアツ！！」

ペガスのエネルギーとブレードのエネルギーを合わせたハイコート・ボルテッカとエビルのボルテッカがぶつかり合つた。

「ぐうううううつ…………あああああああつ！？」

ハイコート・ボルテッカがエビルのボルテッカを押しきり、そのままエビルに直撃した。

「ハアツ…………ハアツ…………ハアツ…………ハ、エビルはつ！？」

ブレードはペガスを待機状態に戻して、エビルを探した。

「う…………うう…………」

そこには変身が解除され、横たわっている千冬の姿があった。ハイロー・ボルテッカの何割かがエビルのボルテッカと相殺し、この程度で済んだようである。

「千冬さんっ！……千冬さんっ！……」

「ん…………な、直哉か…………はっ！？わ、私は…………」

「…………大丈夫みたいだな…………ぐつ！？」

「な、直哉っ！？」

安心して緊張の糸が途切れた直哉は変身が解除され、そのまま気を失つた…………。

「直哉っ！そ、そつだつ医務室に…………」

『その必要はないよ、織斑千冬…………』

「なつーだ、誰だつー？」

倒れた直哉を介抱するために医務室に運ぼうとするが、突如、頭に響いた声に驚く。

『僕だよ、君にエビルのクリスタルを渡した神だよ…………』

「あ、貴方が…………！そ、それよりも直哉が…………！」

『彼なら心配ないよ…………君を助けるためにかなり疲弊はしているけ

どね?』

それを聞いた千冬は直哉にした事を思い出した。

「あ……わ、私は……何て事を……」

『……まあ、彼の自業自得だから君が其処まで『氣にする』ことはないんだけどね……まあこれぐら『氣』してあげようかな……』

その声と共に直哉の身体が淡い光に包まれた。

「な、何をする氣だつ……?」

『…………ふう、これでよし……一応、彼の傷は直しておいたよ……しづらくなれば疲労で眠つてゐるから当分は起きないだろうな』

「そ、そつか……よかつた……」

千冬は神の言葉に安堵した。

それでも、自分が操られたとき<sup>1</sup>にした直哉への暴行が消えずにいた。

「しかし……わ、私はどうしたひ……」

『…………彼なら笑つて許してくれると思つたけどね……若しくは、君から告白しちゃひとかね?』

「なつ……な、な、な、何を言ひ出すか?……?」

『フフフ……わっかいなあ……おつと、あまり長く関わつてたら他の神達にどやされるから僕はこれで消えるね

アリーナの惨状も僕の方で直しておくれりー。』

「あー…ひ、ちよつとつー?」

『あ、そつそつ……エビルのクリスタルは君を所有者と認めたみた  
いだから洗脳とかはもう無くなつたからね~』

最後にそれだけを言い残して、神からの声は消えた

「…………はつー? そ、そつだつー! 直哉は…………」

「……………………」

千冬は直哉の様子を見たが、いい寝顔でグッスリと眠つていた  
。

「…………心配かけさせおつて…………」

撫然とした千冬だがそのまま直哉の頭を膝に乗せ、直哉の頭を撫で  
ていた…………。

「…………ありがと、直哉…………」

「…………だ…………」

そのまま直哉に感謝を込めて礼を言つたが、直哉の発した寝言が気  
になつて耳を傾けた。

「…………愛してゐる…………千冬…………」

「…………起きてる…………時に、言わんか…………馬鹿者…………」

直哉の告白に涙を流しながら軽く頭を叩いた千冬。  
だが、態度とは裏腹に表情は嬉しそうだ……。

「…………私もだ、直哉…………」

そのまま2人の影は重なり、辺りの静けさはそんな2人を暖かく見  
守っているかのように静かだつた……。

こうして、宇宙の騎士同士の闘いは幕を閉じた。  
次の日からはまた騒がしい日常に戻るだらう…………。だが、今はこ  
のままで…………愛する者同士の安らかな時間を…………。

episode - 12 終結……（後編）

いい忘れましたが、幕間を書いたら記念物の話を書いひつと題こします

感想をくれた読者の皆さんに感謝します（^人^）

ありがとうございました

## 第一部までの設定（前書き）

今回は第一部の設定です。

全く、原作を知らないのでWiki便りですが……

## 第一部までの設定

如月 直哉

この物語の主人公。  
イケメン神に殺され、ISの世界に転生した（享年20歳）  
その際にテックマンをISにしてもらい、肉体能力、知識、資金を  
チートクラスにしてもらつた強欲野郎。

普段は超が付くほど面倒臭がりだが、面倒臭いと言いながら一夏に  
ISの戦闘を教えたり、一夏ハーレムのヒロインにアドバイスした  
りと友人思い。

更には弄れる対象があればDMSモードのスイッチが入り、泣きが入  
るまでとここん弄る。

親しい人間には気軽な感じで話すが、自分や友人に敵意を現す人間  
には口が悪くなり、威圧的になる。

目上の人間には「長幼の序」を備えており、敬語で話す。

戦闘はテックマンブレードへテックセットし、ランサーを用いた近  
接戦や、ワイヤーをランサーに接続し投擲する事も可能。  
装甲を変型させ超高速で突撃する「クラッシュユイントルード」、肩  
部アーマーのビーム砲を展開させ、そこから発射される必殺武器、  
「ボルテッカ」を備える。

ただし、ボルテッカはエネルギーを多量に消費し連発は出来ない。  
(エネルギーを調整すれば最大で一発使用可能)

元のISよりも圧倒的に性能が高く、直哉のチート能力もあって千  
冬を越える事実上のIS学園最強の人間である。

第一部の最終話で寝言で千冬に告白する。  
……2人のその後が楽しみである。

織班 千冬

原作主人公の一夏の姉にしてこの物語のヒロイン。

IS学園ではその容姿と厳格な態度で生徒に人気が高い。

幼い頃の直哉に何度も勝負を挑み、その度に直哉に地に付けられた。  
小学校を卒業する直哉に再戦の約束をし、別れた。

その頃から直哉への恋心を自覚し始めた模様。

3年後に直哉と再会し、模擬戦兼、入学試験で直哉と戦い圧倒的な差で敗北を喫した。

それが切っ掛けで心の奥底では力の渴望が残り、イケメン神からペガス経由でエビルのクリスタルを受け取るが、エビルのクリスタルの副作用である洗脳効果によって心の奥底にある力の渴望を引き出されてしまい、直哉のブレードと相対する。

エビルとなつてからは基本的な装備は同じだが、エビルのランサーは十字型に変形させてブーメランとして扱うことができる。

エビルの一番の特徴はブレードのボルテッカのエネルギーを吸収し、自らのボルテッカとエネルギーをコントロールして放つことが可能な「PSYボルテッカ」を使用可能。

ブレードとの戦闘の際に使用され、際どいところまで追い詰めるが、ペガスのエネルギーとブレードのエネルギーを混ぜ合わせて放つた「ハイコート・ボルテッカ」によつて敗北する。その際に洗脳効果が消えて正気に戻る。

第一部最終話にて疲弊して眠つている直哉にキスをして自らの思いを伝える。

織班 一夏

原作での主人公のポジションだが、この作品では直哉の親友とランクが下がつた。

高校入試にて置かれていたTDSを起動させてしまい、世界で一人目

のISが使える男子として女だけのIS学園に入学する羽田になった。

初めはISの事に関して無知もいいところであったが、直哉のスバルタ式の教えで何とか授業にも付いていけるようになつた。過去に幼馴染みの篠ノ乃篠の親の剣道道場に通つて剣道を習つていたが、入試や生活の事もあり中学3年間は帰宅部まつしぐら。

IS学園に入学してからは篠に剣道でじこつてもらい、昔の勘を取り戻す。

専用ISは「白式」

武装は近接ブレード一本しかないが、「白式」のワンオファビリティーである零落白夜によつてバリア無効化能力が備わり、絶大な攻撃力を誇るが、シールドエネルギーを多大に消費させ、事実上の一撃必殺型である。

一夏自身、無自覚の内にフラグを立てる為に篠を初めとしたヒロイン勢は気が気ではない様子。

いづれは直哉と戦つてみたいと思つてゐる意味で自殺志願者である。

直哉と一夏の幼馴染みにして一夏ハーレムの一人。

幼い頃に苛められていたところを一夏に、そしてそこにいた直哉に助けられた。初めに体を張つて助けてくれた一夏に好意を抱き、それ以来慕つていたが……姉の「篠ノ乃 束」が原因で転校することになり、一夏達と離れ離れになる。

離れていても一夏を慕う純情な少女だが、素直に好意をぶつけられずについ暴力的な態度を取つてしまつ。

剣道の全国大会優勝者でE.S学園の一夏の師匠的な存在。一夏の隣に立ちたいと思っているが、専用機を持っていないためか、やきもきしている。

### セシリ亞・オルコット

イギリスの代表候補生の少女。

金髪に縦ロールの髪型をしており、直哉からは「ドリル女」と呼ば

れている。

当初はE.S学園に入学してきた直哉と一夏を快く思つておらず、見下した態度を取っていた。

（2人からは面倒臭い女と思われていたが……）

そして、一夏の発言に激怒して決闘を申し込む。

（直哉はそれに巻き込まれた形）

彼女が男を見下すのは死んだ彼女の父親が関係していると思われ、戦いの最中での一夏の生き方に胸を打たれ一夏に惚れるようになる。その後に続く直哉との戦いでは手も足も出せずに終わり、心の奥底では直哉の全力と戦いと思っているが、直哉と全力で戦えるのは同じテッククリスタルを持った千冬しかいないと言う事を彼女は知らない……。

専用ISは「ブルー・ティアーズ」

BTライフルとビット、申し訳程度に備わっている近接装備を備えている、いわば「遠距離戦用」の機体である。

ビットで相手を惑わせ攻撃をせらるが、ビット発射時は自分は攻撃できないと言つ欠点を持つ。

## ペガス

ブレードのサポートIS。原作テッカマンブレードでのブレードのサポートメカなのだが……。

人工知能が組み込まれており、人間臭くなってしまった。直哉の性格が移ってしまい、面白そうな人物がいれば弄つてしまう癖を持つ。

基本的に直哉の執事的な存在になつており、千冬の事を「奥方様」と呼ぶ。

生活面に関しても優秀で外見が完全にロボットなのに料理、洗濯などの家事全般をこなす。

……一家に一台は欲しいと思つのは作者だけではないはず……。

直哉と千冬の事を暖かく見守つている。

戦闘面に関してはブレードの全面的にサポートに回り、ミサイルやバルカンで相手を牽制する。

そしてブレードとペガスの特筆すべき点は、ブレードのボルテッカエネルギーとペガスのエネルギーを合わせて放つ「ハイコート・ボルテッカ」。

ブレードのボルテッカをも凌駕しており、含有するエネルギーが大きすぎてエビルのエネルギー吸収が役に立たなくさせた。

なお、ペガスの存在を知っているのは直哉、千冬、一夏、第だけである。

更識 横無

IS学園の生徒会長。

転校生である直哉と一夏に興味を持ち、直哉と千冬の入学試験をこつそり見ていたが、直哉に呆気なく見破られる。

その正体は裏工作を実行する暗部に対する対暗部用の暗部「更識家」の当主であり、十七代目の「横無」。

IS学園で最強と称されていたが、直哉の登場により最強の座が搖るぎ、内心は穏やかではない様子。

それ故に直哉に多大な興味を持つてしまつたようである。

今のところ、恋愛的な意味で千冬のライバルになる確率は低いが、今後の話如何ではどうなるかはわからない……。

山田 麻耶

IS学園での直哉のクラスの副担任。

男子が入ったことにより、騒がしくなったのを抑える苦労人。

童顔で眼鏡巨乳であり、走る毎に揺れる一子山は直哉の田の保養になっている。

（余談ではあるが、その光景を見た千冬は寮長室で剥れ、直哉は嫌を治すために精神的に多大な疲労を負った）

時折、千冬に姉弟関係や直哉の事をからかっては制裁されている。

## 第一部までの設定（後書き）

次は幕間を書こうと思います。  
まあぶつちやけると記念作品に入る前の繋ぎ的なモノなので、そんなに長くはないです。

## 幕間 episode -1 | 圧強化＆白粋改良計画？（前書き）

前回に書いた幕間episodeは所々、いえ全てにおいてグダグダだったので大幅に書き直しておきました。

もつ既に原作じゃなくなってるし、原作の時差もメチャクチャになってしまいます。

それでも良ければ見てやってください。

幕間 episode -1 ～真強化＆白式改良計画？

SIDE 直哉

「ん……むう……知ってる天井だ……」

半ば寝ぼけ眼で田が覚めた。時計を見ると、夜中の3時だ。いつの間に寝てたんだっけ、俺……しかも普段使つてる布団じやなく……

「何でベット……？それ」「……

俺は同居人である千冬さんの姿を探すと、ベットの端に人の頭があつた。

「スウ……スウ……」

「…………うか、思い出した…………」

俺は意識を失う直前の事を思い出した。

つか、千冬さんにエビルは正に鬼に金棒だなあ……。我ながらよく勝てたもんだ……。などと関心していると

「んう……な、直哉……？」

「…………おはよー、千冬さん……」

千冬さんが田を覚まして頭を上げた。

つてあれ?? 何か涙ぐんでないか?????

「だ、大丈夫なのか、身体は……！？」

「いやいや、落ち着いて……つてそういうば……？」

俺はエビルヒ化した千冬さんに蹴りを入れられて肋が何本か逝った  
筈だけど…………触つてみたけど痛みを感じない…………。

「……………？」あの時、確かに肋が折れたはずなのに……

「……………？」あの時、確かに肋が折れたはずなのに……

「ああ…………氣を失つたお前にあの神がお前を治していったんだ……」

「……………？」そういふことか…………アフターケアは万全つて訳か…………。  
ん? 何か千冬さんの顔が浮かないな…………。

「……………直哉、本当にすまなかつた…………私のせいであるな」と  
「……………」

「……………やれやれ、別に千冬さんのせいじゃないのに…………」

俺は千冬さんの頭に手を置いて撫でた。

「あ…………」

「……………」「……………」

「……………」「……………」

「……………」「……………」

「し、しかし……」

「まあだ引きずりますかね、この人は……！」

「まあ……判つたよ……俺の頼みを聞いてくれればこの件はチャラにするよ……それでいいかな?」

「こ」で千冬さんと問答を繰り返しても拉致が明かないので俺から妥協案を出すことにした。

「わ、わかった……それで……頼みと言つのは何だ?」

「まあ、難しいことじゃないさ……今度の休日(に)買い物に付き合つてくれるだけ……「か、買い物つー?」……で……」

何でそこまで身を乗り出して食い付いた!?  
しかも顔近いからキスしちゃうぞ!?

「そ、それは……ふ、ふ、2人きりでかつ!?

「いや……まあ、一夏達誘つてもいいん……「2人きりだなつ!?  
……つん、2人きりです……」

あそこまで目を爛々と輝かせて一夏達を誘うなんて言えない……!  
言えた奴は俺が勇者の称号を授けるぞ!-

「せうかそうか……では、明日(に)でも出掛けのぞ!」

「まあ、俺は構わないんだけど……千冬さん、仕事は?」

そり、EIS学園の教師ともなればいくら休日でもそれなりに仕事があるはずだ。

「そんなもの、山田君、人に押し付けて休んだら買い物の件は無しだよ?」……きみと仕事する……」

「……どんだけ職権濫用する気だ、この人は……。あれ、考えようよってはこれ、データじゃないか?」

「で、では明日の昼にターミナルに集合とこいつでいいな?」

「う、うん……まあいいけど……」

「……女は支度に時間が掛かるみたいだから、そり言つたんだろうな……」

俺は徐に時計を見ると夜中の4時に差し掛かっていた。  
こんななんじや一度寝しても遅刻確定だな……。

「ペガス、起きてくれ」

俺はペガスを起動させ、現させる。

『御呼びですか、マスター……おや、奥方様……体調は如何ですか?』

「だから、奥方様と……まあいい、身体の方は大丈夫だ、問題ない」

『それは何よりで』『やこます……それで、マスター?』用件は……

……』

「ああ、俺は今から屋上に行くから……』の部屋の片付けを頼むわ

俺は部屋の見回して部屋の惨状を認識した。  
前に片付けたのに、もう既に汚くなっていた。

『畏まりました……では、奥方様……お手伝い願えますかな?』

「わ、私もなのかつ！？」

『マスターを心配して取り乱すのはわかりますが、部屋を散らかすのは頂けませんな……』

□調からしてペガスも怒つてゐなあ……。

俺はそんな2人を余所に部屋を出て屋上に向かつた。

「はあ……流石にあれ以上千々さんとシラ合わせてたら俺が緊

張してゐるのバレバレになつてたなあ……」

俺は屋上の柵を背もたれにして座り込んだ。

「…………しかし、ここに入学してからそんなに経つてないのに中身の濃い日常になつたなあ…………面倒臭いけど、嫌いじやないな……」

俺は屋上の扉に背を向け…………。

「お前もわざなんじやないか、一夏?」

「…………何だ、気付いてたのか?」

扉が開いて、現れたのは一夏だった。  
つか、こんな時間まで起きてて平氣なのか?

「それで?…………俺に何か用でもあつたか?」

「こや…………早く起きてまつてトレーニングしようかと思つて外出  
たらお前がいたんだよ。」

「…………お前も大概、ひまなやつちやなあ…………」

「お前ほどじやないよ、直哉…………」

俺達は顔を見合させて笑いあつた。

「…………直哉、お前…………千冬姉の事、びつ思つてゐんだ……?」

「何だよ、藪から棒に……？」

「いいから答えてくれ……どうなんだ、直哉？」

「……一夏の旦マジが真剣だ。……匕ヒつやうおふせけで話すわけにはいかないな。」

「……俺は千冬さんを愛してゐる……世界中の誰よりもだ……」

「……」

「……」

俺は一夏の旦を見据えて本心を伝えた。

一夏も無言で俺を見据えている。

「やつか……ならお前に千冬姉を任せても大丈夫そうだな……」

俺は一夏の返答に軽く驚いた。

こいつの事だから反対しそうだったんだけどな……

「……いいのか？てつきりシスコンのお前だから任せられるかあつ……つて言ひそうなんだが……」

「誰がシスコンだよ……お前なら千冬姉を守れる程に強いし、直哉だから許せるつていうのもあるかな……」

馬鹿そうに見えて案外、考てるんだなあ……何て素直に思つてしまつたぞ！

「……お前、何か失礼なこと考えなかつたか？」

「事実を思つただけだから気にするなよ…… 義弟よ……」

「…………何かお前に言われると違和感バリバリだなあ……」

「俺もお前が義弟だと思つと人様に顔向け出来ねえわ……」

「そこまで叫うかっ！？」

「「ブツ……ハハハハハツ！」」

俺たちは顔を見合させて笑い合つた。

やっぱコイツは変わらない……唐変木でバカでお人好しの親友ダチのまんまだわ！

「ハハハハハツ……ハアーツ腹痛え……まあ、これからもよろしく頼むわ、親友」

「ああ、これからもよろしくなー親友！」

「ンツ……

俺達は互いに拳を合わせあつた。  
と、不意に一夏は真剣な目になつて俺を見据えた。

「なあ…………あの時の約束、覚えてるか？」

「あの時…………ああ、セシリ亞との勝負が終わったら戦うってアレか？」

「うう……ええ、戦うって言つたんだっけなあ…………Hビルの件で色々あつたからなあ…………」

「…………明日…………いや、もう今口か…………俺と闘つてくれないか？」

「本気のお前と…………」

「…………マジでか、それ…………流石にマジでやつたら…………」

「ああっ！瞬殺されるのがオチだけどな…………でも、本気のお前と闘つてみたいんだ！」

「…………一夏のやつ、マジだ…………マジで全力状態の俺とやりたがつてる…………」

「流石に俺が全力出すのは気が引けるな…………」

「なつー何でだよつー？」

「…………加減が難しくなるからだ…………俺が加減をミスつたら…………お前、死ぬぞ？」

「つー…………そこまで差があるのか…………？」

「…………ああ、お前には酷なことだけだ…………だからセシリ亞戦や千冬さんには全力を出せなかつたんだよ…………」

エビルの時は除くけどな……アレはテッカマン同士の闘いで尚且つイケメン神がいたから全力を出せた。

アイツがいなかつたらアリーナ何て木つ端微塵でエジ学園に多大な被害を及ぼしていったからな。

「…………」

一夏は無言で俯いてる……本気の俺とやり合えないからか……。

……はあ、仕方ないな……。

「どうしてもやるなら方法が無い」ともない……

「ホ、ホントかつ！？」

いや、急に顔上げて目え爛々に輝かされてもちよつと引くわ……。

「まああくまで可能性はあるがな……ちょっと調べたい事あるから着いてきな

俺は一夏を余所にそのまま屋上を出ていった。

「あつーおいつ……何なんだよ、一体……」

愚痴りながら一夏も俺の後を追つために屋上から出た。

「ただい…… め……」

「………… おかえり」

『俺と一夏が寮長室に戻ると、セリにいたのは匪惑いの色が濃い千冬さんと…………』

『お帰りなさいませ、マスター………… むや、一夏お坊っちゃんもいらっしゃったのですか?』

割烹着にお玉片手に持つて居るペガスだつた。

『どこのオカンだ、お前は…………』

つづか、お坊っちゃん…………

「ブゥッ………… ハハハハハハッ!!」

「クツ………… ククククククツ…………」

ヤバイッ！ダメだ……い、一夏がお坊っちゃんまで……（笑）

「あ、えっと……ペガスだつて……」

『はい、一夏坊っちゃん』

「…………その、一夏お坊っちゃんまつて止めてくれないかな？…………  
ていうか千冬姉、笑いすぎだから！…………直哉つ！お前も腹抱えて爆  
笑しそうだつ……！」

「いや、だつて…………クッ！」

「お前にお坊っちゃんは似合わんぞ…………つー」

俺と千冬さんは一夏の顔を見て笑い合つた…………。  
あ～…………ホント腹痛え…………一夏はその間憮然としていた…………。

それからしばらくして、俺達の笑いも收まり、一夏の機嫌が治つた  
頃、ようやく本題に入った。

「…………はあ…………そろそろ本題に入るかな…………千冬さん、頼みがあ  
る」

「何だ、藪から棒に…………お前の頼みならいくらでも聞くぞ」

……俺からの頼みと聞いて嬉々とし始めたな。  
まあ、好都合と言えば好都合か……。

「明日の夜から一週間、一夏と一緒に学校休ませてくれないかな?」

「…………なんだと?」

「うわ…………目に見えて機嫌が悪くなつたし…………。  
つか、一夏一震えてないでお前も何とか言わんかいつ!」

「いや、実はね…………一夏のHISの「白式」だつけ?…………あれの改  
良をしようつかと思つてね」

俺が休ませてもうひつ理由を語りつと、千冬さんは驚いた顔をした。

「あ、お前つ……HISの改良なんて出来るのかつ!?」

「あ、言つてなかつたかな?…………改良だけじゃなくて「ア」も作れる  
けど?」

「…………」

開いた口が塞がらなつてこんな風な事言つのかねえ…………?  
千冬さんが驚いた様に固まつていた。

「な、なあ…………話の展開がよくわからないんだけど…………」

一夏がそこ口を挟んできた。

つか、今の流れで内容掘もつせ…………。

「まあ簡単に言つてだ……IS如きじや俺の本気とやりあえんから、その為にお前のISを改良するつて事だよ、俺がな」

「ええつー? も、お前…… そんな事出来るのかよつー?」

「Jの姉弟は、回りJに驚くなよ。」

「だ、だが……ISの無断改造は違反だぞ！？」

「そんなん知らんがな……と言うかハックしまくつての何処ぞの頭のイカれた兎よかマシでしょうに……」

「しかし、わざわざおもむろに

これでもいい顔しないか……なら、余り使いたくないけど……。

「そういえば、千冬さん？……高校時代に確かにこんな着てなかつたっけ？」

俺は一夏に見せないよつにある写真を見せた。

「なつ！？お、お前つ！……」れを何処でつ！？」

見た瞬間に千冬さんの顔色が面白いぐらいに変わった。

だ。

「これを学園全体に広められたくないなれば、休みをください」

「ぐ、ぬぬぬ…………わ、わかった…………！」

よし、これで許可は貰つたな！

「あ、そつそう。千冬さんも着いてきてくれ…………ビルのチョックもしておきたいから」

「…………わかった…………だが、行くのは授業が終わつてから行くから行くのは夜からだ。」

「ま、それに關しては仕方ないかな…………わかったよ…………まあ普段からの授業でのストレス解消にもなるんじやない？…………主に一夏の扱きで」

「つて俺かよつ！？」

「ほひ、それは面白こ…………基、いいストレス解消になりそうだな！」

「つて千冬姉までー？」

まあ一夏を弄るのはこじこじしておひひ。  
…………もうちょい弄りたいけど…………。

「てな訳だ、一夏…………1週間分の身仕度はしどけよ。」

「わ、わかった…………よろしく頼む…………」

「ん。それと移動は夜間急行で行くから。…………チケットに關しては俺が取つておくから心配しなくていいから」

「わかった……」

「あ、まあ……」

ところが、明日の夜から一夏強化&TIS改良計画の始まり始ま  
る

## 幕間 episode - 1 - 『強化＆白式改良計画? (後編)』

次回は強化計画の一日目です。

ちよつと読者の皆さんにも「協力お願いしたいのですが、白式の強化案を募集します。

誠に勝手ではござりますが、協力をお願いいたします m(—)m

締め切りは10月22日の朝の6時まで募集します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4233x/>

---

宇宙の騎士はISの世界でどう動く！？

2011年10月19日21時25分発行